

## 市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ

—予備調査（H30/R1）および仲村渠殿遺跡記録保存—

2024年3月

沖縄県南城市教育委員会







## 市内遺跡発掘調査報告書Ⅴ

—予備調査（H30/R1）および仲村渠殿遺跡記録保存—

2024年3月

沖縄県南城市教育委員会



## 序文

本書は、沖縄県南城市教育委員会が文化庁の補助を受け実施した埋蔵文化財予備調査および個人住宅建設前の本調査の記録になります。

本市は西側を除いて、三方が海に囲まれ、内陸は石灰岩台地特有の起伏が多い地形であり緑豊かで湧水に恵まれた地域であります。

一方で、少子高齢化、インフラ老朽化などの問題解決を見据え、あらたなまちづくりを進めてきた結果、人口も増加傾向にあります。

本記録は、こうした社会情勢の変化に伴う文化財照会件数の増加を示しています。

なお、調査は、施工関係者や地域住民の文化財保護業務に対する多大な協力のもと実施しました。また沖縄県教育庁文化財課の指導もいただきました。

末尾になりますが、関係各位の御厚意に厚く御礼申し上げます。

2024年3月

沖縄県南城市教育委員会  
教育長 具志堅 兼栄

## 例言

1. 本書は、沖縄県南城市が国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金を受けて実施した埋蔵文化財保護事業に係る報告書である。

2. 記載年度は平成30年度・令和元年度（平成31年度）であるが、同じ埋蔵文化財包蔵地の過年度の予備調査については、参考として掲載するように努めている。

3. 本書の執筆は、各調査の業務報告をもとに勢理客宣子が行った。なお、第2章2 参考1）横山幸平、参考2）勢理客智也、第2章4（3）・第4図② 株式会社パスコ沖縄支店 木村謙介、第3章 第3節（2）、（4）① ② 株式会社埋蔵文化財サポートシステム小石龍信、第3章第4節 パリノ・サーヴェイ株式会社の執筆による。校正は嶺井菜美貴、比嘉千明が協力した。

編集作業は、株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店に支援委託を行っている。

4. 現地調査は、野外記録調査を実施した日（内業除く）を記載している。

5. 土壌や遺物の色調などは、新版標準土色帖（2002年版）を参考にしている。

6. 出土遺物及び各種記録類は、沖縄県南城市教育委員会で保管している。

7. 本報告書に記載されている内容（図表や写真を含む）を引用する場合は、目的が教育普及・論文掲載であれば、「出所の明示」を行うこと。

8. 本報告書で掲載する時代名称は、『沖縄県史 各論2 考古編』（2003年刊行 財団法人沖縄県文化振興会）を参考にしている。なお、グスク時代は12世紀～16世紀初頭とする。

9. 本文内の調査位置図および試掘箇所位置図は、GIS管理者の承認を得て、南城市が保有する地形データ、地籍データを利用複製したものである。調査位置図の縮尺は7500分の1、北方位が上辺である。試掘位置（TP）は目安として杭座標1点の利用もしくは大まかな位置で掲載している。

なお、編集に際しては、小縮尺で文字などにより図面が煩雑になる場合は、周辺の遺跡等を省いたりしている。

10. 本報告書掲載の写真は、委託業者もしくは現場担当で撮影したものから選択し、市職員で撮影したものは、図版キャプションに（南）と注記している。なお、写真はデジタル撮影されたものである。



## 本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	文化財にかかる照会状況	1
第2節	調査体制	1
第3節	分類について	5
第2章	予備調査の記録	7
第1節	試掘調査	7
1	手登根島之上原遺物散布地	2
2	稲福遺跡(山グスク)	
3	新里運座原遺物散布地	4
4	中山海岸遺物散布地	
5	玉城字糸敷地内	6
6	玉城字船越地内	
7	仲村渠殿遺跡	8
8	下代原遺跡	
9	手登根島之上原遺物散布地	10
10	久手堅地内	
11	真境名遺跡	12
12	新里運座原遺物散布地	
13	久手堅地内	14
14	佐敷島宜原遺物散布地	
第2節	立会調査	46
1	知名地内	
第3章	仲村渠殿遺跡 記録保存調査	47
第1節	調査に至る経緯	47
第2節	位置と環境	48
第3節	調査	48
第4節	自然科学分析	59
	はじめに	
1.	試料	
2.	分析方法 (1)放射性炭素年代測定 (2)微細物分析	
3.	結果と考察 (1)放射性炭素年代測定 (2)微細物分析	
	引用文献	
第5節	総括	62
参考文献		75
	報告書抄録	
	奥付	

## 表

第1表	文化財照会件数
第2表①	予備調査一覧 試掘調査
第2表②	予備調査一覧 立会調査
第3表	記録保存調査一覧
第4表	資料整理一覧
第5表	遺物注記簡略表記一覧
第6表①	グスク土器系数 1991 分類表記整理表 大分類「器形」
第6表②	グスク土器系数 1991 分類表記整理表 大分類「鍋形」の細分類
第6表③	グスク土器系数 1991 分類表記整理表 大分類「壺形」の細分類（中分類 設定なし）
第6表④	グスク土器系数 1991 分類表記整理表 大分類「鉢形」の細分類（小分類：設定なし）
第6表⑤	グスク土器系数 1991 分類表記整理表 大分類「甕形」の細分類（中分類：設定なし）
第6表⑥	グスク土器系数 1991 分類表記整理表 底部
第7表	稲福遺跡H 26/ H 27 実測遺物観察表
第8表	稲福遺跡H 26/ H 27 出土遺物点数表
第9表	TP 3 遺構覆土観察表（検出面）
第10表	玉城字系数地内 実測遺物観察表

第11表	玉城字系数地内 出土遺物点数表 遺構観察表
第13表①	仲村渠殿遺跡 出土遺物点数表
第13表②	仲村渠殿遺跡 出土遺物点数表
第14表①	仲村渠殿遺跡 実測遺物観察表
第14表②	仲村渠殿遺跡 実測遺物観察表
第15表	放射性炭素年代測定結果
第16表	微細植物片洗出し・種実測定結果

## 図

第1図	手登根島之上原遺物散布地調査位置図 (縮尺 1/7500)
第2図①	稲福遺跡(山グスク) 調査位置図 (縮尺 1/7500)
第2図②	稲福遺跡H 26/ H 27 遺物実測図 (S=1/3)
第3図	新里運座原遺物散布地調査位置図 (縮尺 1/7500)
第4図①	中山海岸遺物散布地調査位置図 (縮尺 1/7500)
第4図②	旧海岸鎮位置想定箇所(断面) イメージ
第5図①	玉城字系数地内調査位置図 (縮尺 1/7500)
第5図②	試掘箇所位置図 (縮尺 1/1000)
第5図③	玉城字系数地内 TP 1 (S=1/60)
第5図④	玉城字系数地内 TP 2 (S=1/60)
第5図⑤	玉城字系数地内 TP 3 (S=1/60) その1
第5図⑥	玉城字系数地内 TP 3 (S=1/60) その2
第5図⑦	玉城字系数地内 TP 4 (S=1/60) その1
第5図⑧	玉城字系数地内 TP 4 (S=1/60) その2
第5図⑨	玉城字系数地内 遺物実測図 (S=1/3)
第6図	玉城字船越地内調査位置図 (縮尺 1/7500)
第7図	仲村渠殿遺跡調査位置図 (縮尺 1/7500)
第8図	下代原遺跡調査位置図 (縮尺 1/7500)

第9図	手登根島之上原遺物散布地調査位置図 (縮尺 1/7500)
第10図	久手聖地内調査位置図 (縮尺 1/7500)
第11図①	真城名遺跡調査位置図 (縮尺 1/7500)
第11図②	真城名遺跡試掘箇所位置図 (縮尺 1/800)
第12図	新里運座原遺物散布地調査位置図 (縮尺 1/7500)
第13図	久手聖地内調査位置図 (縮尺 1/7500)
第14図	佐敷島宜原遺物散布地調査位置図 (縮尺 1/7500)
第15図	知名地内調査位置図 (縮尺 1/7500)
第16図①	仲村渠殿遺跡調査位置図 (縮尺 1/7500)
第16図②	検出遺構配置略図・平面層序 (縮尺 1/150)
第16図③	調査区層序図 (S=1/60 上：中央東西 下：西壁)
第16図④	遺構完掘状況図 (S=1/60 上：遺構群平 面 下：平坦部断面)
第16図⑤	S26 (炉跡?) 遺構平面図および断面図 (S=1/10)
第16図⑥	遺物実測図 (S=1/3)

## 写真図版

- 図版1 手登根島之上原遺物散布地掘下げ状況 (左: TP 1西壁 右: TP 2西壁)  
図版2 【参考】掘下げ状況 (左: TP 1南壁 右: TP 2東壁) (南)  
図版3① 稲福遺跡掘下げ状況 (左: TP 1北壁 右: TP 2北壁)  
図版3② 稲福遺跡掘下げ状況 (左: TP 3北壁 右: TP 4南壁)  
図版3③ 稲福遺跡出土遺物 (未採集) (左: TP 1 右: TP 2)  
図版3④ 稲福遺跡出土遺物 (未採集) TP 3  
図版4① 【参考1】稲福遺跡H 26掘下げ状況 (左: トレンチ① 右: トレンチ②) (南)  
図版4② 【参考1】稲福遺跡H 26掘下げ状況 (左: トレンチ③ 右: トレンチ④) (南)  
図版4③ 【参考1】稲福遺跡H 26掘下げ状況 (トレンチ⑤) (南)  
図版4④ 【参考1】稲福遺跡H 26出土遺物 (南)  
図版5① 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況 (左: TP 1 右: TP 2) (南)  
図版5② 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況 (左: TP 3 右: TP 7) (南)  
図版5③ 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況 (左: TP 4 右: TP 4遺構?) (南)  
図版5④ 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況 (左: TP 5 右: TP 5遺構?) (南)  
図版5⑤ 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況 (左: TP 6 右: TP 6) (南)  
図版6 【参考1・2】稲福遺跡 H 26/H 27 実測遺物写真 (左: 1, 2, 4, 右: 3) (南)  
図版7 新里運座原遺物散布地掘下げ状況 (左: TP 1東壁 右: TP 2東壁)  
図版8 中山海岸遺物散布地掘下げ状況 (左: TP 1北壁 右: TP 2北壁) (南)  
図版9① 玉城字糸数地内遺構面検出状況 (左: TP 1北東より 右: TP 3北西より)  
図版9② 玉城字糸数地内遺構面検出状況 (左: TP 2西より 右: TP 2堀切?部分 北より)  
図版9③ 玉城字糸数地内遺構面検出状況 TP 4 北より  
図版9④ 玉城字糸数地内 実測遺物写真 (左: 1~6 右: 7~11) (南)  
図版10① 船越地内掘下げ状況 (左: TP 1北壁 右: TP 2西壁)  
図版10② 船越地内掘下げ状況 (左: TP 3西壁 右: TP 4北壁)  
図版10③ 船越地内掘下げ状況 (左: TP 5北壁 右: TP 6西壁)  
図版10④ 船越地内掘下げ状況 (左: TP 7東壁 右: TP 8西壁)  
図版11① 仲村集殿遺跡出土遺物  
図版11② 仲村集殿遺跡掘下げ状況 (左: 堆積層状況 (ライン入り) 右: 遺構検出状況)  
図版12 下代原遺跡掘下げ状況 (左: TP 1 右: TP 2)  
図版13 手登根島之上原遺物散布地掘下げ状況 (左: TP 1北壁 右: TP 2東壁) (南)  
図版14 久手塚地内掘下げ状況 (左: TP 1南壁 右: TP 2南壁)  
図版15① 真境名遺跡掘下げ状況 (左: TP 1南壁 右: TP 2南壁)  
図版15② 真境名遺跡掘下げ状況 (左: TP 3北壁 右: TP 4東壁)  
図版15③ 真境名遺跡掘下げ状況 (左: TP 5東壁 右: TP 6南側より)  
図版15④ 真境名遺跡掘下げ状況 (左: TP 7南壁 右: TP 8北壁)  
図版15⑤ 真境名遺跡掘下げ状況 (左: TP 9北壁 右: TP 10東壁)  
図版15⑥ 真境名遺跡掘下げ状況 (TP 11北壁)  
図版16① 新里運座原遺物散布地掘下げ状況 (左: TP 1東壁 右: TP 2東壁)  
図版16② 新里運座原遺物散布地掘下げ状況 (左: TP 3東壁 右: TP 4北壁)  
図版16③ 新里運座原遺物散布地掘下げ状況 (左: TP 5東壁 右: TP 6東壁)  
図版17 久手塚地内採集遺物  
図版18 オールソ画像 (S=1/100)  
図版19 仲村集殿遺跡 実測遺物写真 (左: 1~6 右: 7~11) (南)  
図版20 種実遺体  
図版21 遺構群検出状況 (半裁後) 北側より  
図版22 S12 土層断面状況 南より  
図版23 S14 土層断面状況 南より  
図版24 S17 土層断面状況 南より  
図版25 S21 土層断面状況 南より  
図版26 S23 土層断面状況 南より  
図版27 S27 土層断面状況 北東より  
図版28 S28 土層断面状況 南より  
図版29 S30 土層断面状況 南より  
図版30 S31 土層断面状況 南より  
図版31 S32 土層断面状況 南より  
図版32 S33 土層断面状況 南より  
図版33 S26 検出状況 北東より

- 図版 34 S26 炭化物検出状況 北東より
- 図版 35 S26 土層断面状況 北東より
- 図版 36 S26 完掘状況 北東より
- 図版 37 S26 断ち割り状況 北東より
- 図版 38 遺構群完掘状況 北より
- 図版 39 遺構群完掘状況 東より
- 図版 40 遺構群完掘状況 南より
- 図版 41 石材加工痕？検出状況① 南より
- 図版 42 石材加工痕？検出状況②（接写） 東より
- 図版 43 作業風景①
- 図版 44 作業風景②

## 第1章 はじめに

### 第1節 文化財にかかる照会状況

開発事業や、土地調査・不動産鑑定などにかかる文化財の照会件数は下記のとおりとなっている。

第1表 文化財照会件数

年度	照会件数 (内 土地調査など)	調整回答 (内 土地調査など)	試掘 / 立会 / 記録保存 / 内容確認調査件数 (前年度調整含む)	93条・94条
平成29年度	423 (79)	28 (10)	10 / 1 / 0 / 0	—
平成30年度	526 (106)	46 (12)	7 / 1 / 0 / 0	3
平成31(令和元)年度	500 (125)	38 (20)	6 / 1 / 1 / 1	1

その中で、各事業者等から調査依頼書が提出された箇所の予備調査を実施した。

なお、調整が必要として回答した場所は、周知の埋蔵文化財包蔵地のほか、その周辺もしくは未踏査で面積が広大な場合となっている。

### 第2節 調査体制

本業務に係る体制は下記のとおり。

事業主体 南城市教育委員会 教育長 具志堅兼榮（令和5年度）

上原廣子（平成30年度～令和3年度）

事業所管 文化課 課長 山里昌次（令和5年度）

泉 直人（令和2年度～令和3年度）

大城盛直（平成30年度～令和元年度）

係長 宜野座隆行（令和5年度）

仲村孝士（令和5年度）

西平 剛（平成30年度～令和3年度）

事業担当 文化財係 主査 勢理客宣子（平成30年度～令和3年度・令和5年度）

主任主事 横山幸平（令和5年度）

主査 宜野座隆行（令和2年度～令和3年度）

主事 津波陽子（平成30年度）

協力者 嶺井菜美貴、比嘉千明

指導・助言 瀬戸哲也、安里進、知花一正、大塚皓平、中山晋、亀島慎吾、池田榮史（敬称略）

調査等外業にかかる事業は主に支援委託業務（第2表①、第3表）で実施した。また、簡易磁気探査による不発弾等の危険物確認も併せて行った。室内業務である資料整理のうち、遺物の分類および実測遺物抜き出しを市担当職員で行い、その他を委託で実施した（第4表）。

なお、第2表①13、第2表①1に記載している「久手堅地内」は同地点であるが、整理段階で地番の誤認に気づいた。令和3年度には踏査・現地測量などを実施したため、報告は、まとめて後年報告する。

## 第1章 はじめに

第2表① 予備調査一覧 試掘調査

(平成31年度の表記はR1で統一した)

※1 遺物散布地 ※2 当該調査で新規発見遺跡 ※3 整理段階で地図上位置の誤認が確認され、諸手続きを行った。

番号	年度	名称	所在地	調査原因	支援業務(名称は不統一)/受託会社
1	H30	手登根島之上原 ※1	字手登根	個人住宅	埋蔵文化財有無試掘調査支援委託業務H30-1 株式会社 バスコ 沖縄支店 調査員 縄田 愛 技術員 金城浩之 比嘉 勉
2	H30	稲福遺跡	字大城	個人住宅	埋蔵文化財有無試掘調査支援委託業務H30-2 有限会社 ティガネー 調査員 (正) 安次嶺幸太(副) 川端博明 技術員 具志 誠
3	H30	新里運理原 ※1	字新里	個人住宅	埋蔵文化財有無試掘調査支援委託業務H30-3 株式会社 アーキジオ パシフィック支店 調査員 本村麻里衣 技師 山城武憲
4	H30	中山海岸 ※1	字中山	導流堤浸濫	埋蔵文化財有無試掘調査支援委託業務H30-4 株式会社 バスコ 沖縄支店 調査員 木村謙介 技術者 新垣正幸 西銘大吾 喜原武祐太
5	H30	根石ダスク周辺 遺跡 ※2	字糸敷	事業計画 ほか	埋蔵文化財有無試掘調査支援委託業務H30-5 安西工業株式会社 沖縄支店 調査員 入江剛弘 技術員 大城 正
6	H30	船越遺跡 隣接地	字船越	市道新設	埋蔵文化財有無試掘調査支援委託業務H30-6 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店 調査員 小石龍信 技術者 堀浩一朗
7	H30	仲村渠殿遺跡	字仲村渠	個人住宅	埋蔵文化財有無試掘調査支援委託業務H30-7 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店 調査員 小石龍信 技術者 堀浩一朗
8	R1	下代原遺跡	字佐敷	個人住宅	埋蔵文化財予備調査支援委託業務(下代原遺跡地内) 株式会社 イビソク 沖縄支店 調査員 喜多亮輔 技術者 屋比久一男
9	R1	手登根島之上原 ※1	字手登根	個人住宅	埋蔵文化財予備調査支援委託業務(手登根島之上原遺物散布地内) 株式会社 島田組 沖縄支店 調査員 伊波直樹 技術者 国吉真一郎

番号	年度	名称	所在地	調査原因	支援業務(名称は不統一)/受託会社
10	R 1	久手聖地内	字久手聖	駐車場整備	埋蔵文化財予備調査支援委託業務(久手聖地内) 有限会社 ティガナー 現場代理人 友寄英人 技術員 吉岡 宏(調査員)
11	R 1	真境名遺跡	字大城	倉庫等整備	埋蔵文化財予備調査支援委託業務(真境名遺跡地内) 株式会社 島田組 沖縄支店 現場代理人 國分篤志(調査員) 技術者 上本 力 名嘉山勇樹 國吉真一郎
12	R 1	新里運原原索1	字新里	個人住宅	埋蔵文化財予備調査支援委託業務(運原原遺物散布地内) 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店 調査員 小石龍信 調査補助員 松本太郎 技術者 上原尚樹
13	R 1	久手聖地内索3	字久手聖	内容確認	埋蔵文化財予備調査支援委託業務(久手聖遺物散布地内) 株式会社 大信技術開発 沖縄支店 現場代理人 大阪亜矢子 調査員 柳田利明 技術員 中島健太郎 横山精士 竹田将仁

第2表② 予備調査一覧 立会調査

番号	年度	名称	所在地	調査原因	
1	H 30	久手聖地内索2	字久手聖	掘削作業	沖縄戦戦没者遺骨収集作業立会
2	R 1	佐敷島宜原索1	字佐敷	個人住宅	—
3	R 1	知名地内	字知名	個人住宅	工事立会

第3表 記録保存調査一覧

番号	年度	遺跡名	所在地	調査原因	支援業務/受託会社
—	R 1	仲村渠殿遺跡	字仲村渠	個人住宅	仲村渠殿遺跡記録保存調査 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店 調査員 小石龍信 調査補助員 松本太郎 技術員 上原尚樹

## 第1章 はじめに

第4表 資料整理一覧 ※本報告に記載される予備調査に係るのみ記載する。

※1 遺物散布地 ★遺跡名誤認（調査段階で澤川原としているが、本来は連原原）  
遺物の分類・集計については、勢理客宜子で行った。

番号	年度	業務内容	対象遺跡	支援業務/受託会社
1	H30	洗い・注記・写真撮影	仲村栗殿遺跡・澤川原★※1 久手堅※1 (第2表(1)3、7、10にかかる)	埋蔵文化財調査支援委託業務(1) 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店 調査員 小石龍信 技術者 堤浩一郎
2	H30	注記・実測・拓本	根石グスク周辺遺跡 (第2表(1)5にかかる)	埋蔵文化財調査支援委託業務(2) 有限会社 ティガネー 調査員 安次嶺幸太
3	H30	注記・実測・拓本 デジタルトレース	稲福遺跡 (第2表(1)2にかかる)	埋蔵文化財調査支援委託業務(3) 国際文化財 株式会社 沖縄支店 調査員 鳥越道臣
4	R1	注記・実測・拓本	仲村栗殿遺跡 (第3表にかかる)	埋蔵文化財資料整理支援委託業務(仲村栗殿遺跡) 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店 調査員 平島義孝
5	R3	採取土壌分析	仲村栗殿遺跡 (遺構番号 S26) (第3表にかかる)	仲村栗殿遺跡 採取土壌分析委託業務(R3) バリノ・サーグエイ株式会社 沖縄支店
6	R3	デジタルトレース 図版作成	根石グスク周辺遺跡(第2表(1)5にかかる) 稲福遺跡(第4表3にかかる)	埋蔵文化財資料整理支援委託業務R3-2(根石グスク周辺遺跡ほか) 有限会社 ティガネー 調査員 吉岡 宏 調査補助員 慶田秀美
7	R3	デジタルトレース 図版作成	仲村栗殿遺跡 (第4表1にかかる)	埋蔵文化財資料整理支援委託業務R3-3(仲村栗殿遺跡) 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店 調査員 平島義孝 調査補助員 喜屋武志保
8	R5	報告書Vの図版編集など	※本報告書刊行にかかる	市内遺跡発掘調査報告書V編集支援業務委託(R5) 株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店 主任調査員 平島義孝 調査員 小石龍信 調査補助員 喜屋武志保

(補足) 遺物の注記は、簡略化のため遺跡名の簡略表記にしている。表記は下記のとおり。

番号は第4表に準ずる。

第5表 遺物注記簡略表記一覧

番号	年度	対象遺跡	遺跡簡略表記
1	H30	仲村栗殿遺跡 澤川原★※1 久手堅※1	H30 仲村栗殿 H30 TP1 沢川原散布 H29 久手堅散布 採
2	H30	根石グスク周辺遺跡	H30 根石グスク
3	H30	稲福遺跡	H27 稲福 H26 稲福
4	R1	仲村栗殿遺跡	R1 仲村栗殿



## 第3節 分類について

## ①土器について

グスク土器は、形状が把握できたものは、1991年刊行の玉城村文化財調査報告書第1集『国指定史跡糸数城跡・発掘調査報告書Ⅰ-』に記載される分類（以下、糸1991）に当てはめている。ほかの土器については、〇〇〇の時期区分や形状で記載している。

簡単に、本報告で用いた糸1991分類記号について、整理しておく。なお、糸1991では大別をⅠ～（アラビア数字）と必要に応じてa～（アルファベット小文字）を付している。これを本報告では、便宜的に中分類、細分類として提示している。今回、大分類の器形である「鍋・壺・鉢・甕」および「底部」について表を用いてまとめた。碗や坏などについては、小型（碗？）等の表記にとどめている。詳細な説明については、糸1991を参照いただきたい。

なお、分類を行う際、どちらにも当てはまるものは「×」、可能性として考えたものは「？」を併記している。

第6表① グスク土器糸数1991分類表整理表 大分類「器形」

器形	頸部	頸部～胴部への伸び	頸部と胴部最大径の間
鍋	なし	—	—
壺	あり	丸み（膨らみ）を持つ	長い
鉢			短い
甕		緩やかな曲線を持つ	—

第6表② グスク土器糸数1991分類表整理表 大分類「鍋形」の細分類

中分類記号（類）	口縁～頸部形状	小分類記号（種）	口唇形状
Ⅰ類	口唇平坦	a種	
		b種	口唇内側突出
	尖るか丸みく平坦	c種	口唇（角？）丸みを持たせる
Ⅱ類	口唇尖る（舌状）	a種	
	口唇平坦	b種	口唇内端もしくは外端尖らせる
		c種	口唇外端突出
Ⅲ類	肥厚	—	
Ⅳ類	踵付き	—	
Ⅴ類	頸部屈曲 「く」もしくは「く」+口縁上方へ折曲げ	—	

第6表③ グスク土器糸数1991分類表整理表 大分類「壺形」の細分類（中分類 設定なし）

小分類記号（種）	頸部形状	ほか：口唇～頸部までの長さ
a種	屈曲が緩い	長頸：2 cm以上 短頸：2 cm以下
b種	屈曲がa種よりきつく屈曲	
c種	口縁が直口もしくは内傾	長頸：2 cm以上 短頸：2 cm以下

## 第1章 はじめに

第6表④ グスク土器系数 1991 分類表記整理表 大分類「鉢形」の細分類（小分類：設定なし）

中分類	口頸～口縁形態
I	口頸がわずかに緩く外傾
II	疑似肥厚タイプ
III	口頸の屈曲がきつい
IV	Iより頸部屈曲が若干きつい。口縁が直口気味と緩く外反がある
V	屈曲が強く、頸部が直立気味に伸び、口縁が平坦になる（T字の片方ない）

第6表⑤ グスク土器系数 1991 分類表記整理表 大分類「甕形」の細分類（中分類：設定なし）

小分類	口頸～口縁形態
a	屈曲はゆるく、口縁で軽く外傾
b	屈曲はきつく、「く」字状に折れる
c	頸部の屈曲はゆるく微弱、直口気味

第6表⑥ グスク土器系数 1991 分類表記整理表 底部

中分類	立ち上がり形態	底面との接合部
I	外側に大きく開く	—
II	内側に閉じた	
III	内側に閉じた	くびれ（筥や指圧で）
IV	外側に大きく開く	

### ②陶磁器について

青磁や白磁などは、「大宰府条坊跡XV（2000年）」の分類を参考とし、14世紀以降に該当する陶磁器は、上田分類、森田分類などを使用している。なお、瀬戸らによる分類「神縄埋文研究5」は、グスク・集落遺跡の出土陶磁器等の傾向と画期を比較するうえで必要となることから、資料整理段階では別途、併記している。

その他、カムイヤキの分類は、伊仙町教育委員会（2005年）などを使用している。

## 第2章 予備調査の記録

### 第1節 試掘調査

#### 1 手登根島之上原遺物散布地

調査地	佐敷字手登根島之上原
調査原因	個人住宅建設
現地調査	平成30年7月9日～12日
調査面積	8㎡（対象面積1,316㎡）
調査職員	（主任）西平剛 （現場担当）勢理客宣子
調査後の措置	慎重工事



第1図 手登根島之上原遺物散布地調査位置図（縮尺1/7500）

#### (1) 位置と環境

調査対象地は国道331号線から東側へ約480m、字手登根北側から字伊原へ向かう市道沿い標高約15mの場所に位置する。調査地の南側は、緩やかな傾斜が徐々に急峻になり、約150mの丘陵上につながる。北側は浜崎川が流れ、耕作地が広がる。

琉球国惣絵図（18世紀後半頃製作。以後惣絵図）には、手登根村（現、字手登根）と記載があり、その北側には河川（浜崎川か？）、南側に平田村（現、字手登根）がある。大日本帝國陸地測量部地図（以後、測量部地図）では、先述の手登根村と平田村が一体となった集落から離れた場所が、今回の調査地付近であり、20世紀前半には集落が広がっていた様相が確認できる。

手登根集落にまつわる伝承では、尚巴志が佐敷小按司として佐敷上グスク（現 国指定史跡 佐敷城跡）に居を構えていたころから領地の中でも重要な位置を占めており、手登根大屋（うふや）に管理を委ねられていたと伝わる。

#### (2) 調査（図版1）

2箇所を試掘を行った。東側をTP1、西側をTP2としている。重機掘削とともに簡易磁気探査を実施した。基本層序は1層が表土、2層が植栽痕、3層が耕作土（一部に植栽痕）、4層が地山である。地表面から深度約1mで粘質の強いシルト質灰色土（地山）が検出され、水が湧いた。

近現代磁器は確認された（未採集）が、グスク時代につながる遺構および遺物は皆無であった。

#### (3) 小結

今回の調査では、地表面から約1m下からシルト質土（地山）が確認された。先述のとおり、グスク時代にかかる遺構や遺物は皆無であった。

平成29年度に本調査対象地から西側約75m地点（第1図A）の個人住宅建築前の試掘を実施し、地表面から深度約2m前後でシルト質土（粘質あり、灰色土）を確認している（図版2）。

本散布地は、沖縄産陶器が主に確認されていることから、近世時代以降に居住区域として広がりを見せたと推定されるが、遺構の確認はなかった。



図版1 手登根島之上原遺物散布地掘下げ状況（左：TP 1西壁 右：TP 2西壁）

**【参考】西側約75m地点（第1図A）**

調査日時：平成29年11月17日

調査原因：個人住宅建築

調査職員：（主任）西平剛（現場担当）勢理客宣子 津波陽子

調査後の措置：慎重工事

**a) 調査（図版2）**

開発側の手配した重機での掘削を実施した。試掘箇所は建物配置外に2か所（南側試掘区：TP 1、東側試掘区：TP 2）設定としている。

概ね2層の土層が確認された。1層が耕作土（黒灰色）および盛土（黄灰色砂粒混じり）、2層が黄灰色の泥岩風化土である。貝類混入の有無で細分可能と見受けられたが、雨天のため、安全面を考慮し人力による壁面の整形は実施せず、上面からの観察および写真のみの記録としている。

TP 1では、地表面から約1.3mで地山風化土貝類混入土を確認し、TP 2は地表面から約2.3mで地山風化土を確認し、ともに湧水層であった。

**b) 結果**

グスク時代以降の遺物、遺構は確認されていない。



図版2 【参考】掘下げ状況（左：TP 1南壁 右：TP 2東壁）（南）

## 2 稲福遺跡（山グスク）

調査地	沖縄県南城市大里字大城
調査原因	個人住宅建設
現地調査	平成30年6月28日
調査面積	11㎡（対象面積約331㎡）
調査職員	（主任）西平剛 （現場担当）勢理客宣子
調査後の措置	慎重工事



第2図① 稲福遺跡（山グスク）調査位置図（縮尺1/7500）

### （1）位置と環境

標高約150mを図る石灰岩丘陵上に位置する。稲福遺跡は北・東・西の三方を急峻な傾斜面に囲われ、南側へ「ハ」状に緩やかに傾斜する。

稲福無線中継所付近標高が約180mと最も高く、1981年には同施設の改修工事に伴う記録保存調査が行われている（第2図①B）。その時にはグスク時代の遺構や陶磁器などが出土している。今回は、その調査箇所から南側へ約180mの場所（第2図①）であり、市道敷設工事により一部削平されている。そのほか、近年は2地点で予備調査が行われている。1つ目が今回の調査箇所から北側約45m（第2図①C）、もう1つが北西側に約110mの場所（第2図①D）である。なおこれらの調査内容を参考として掲載する。

稲福に残る世立てはじめの伝承として、大里村史（昭和57年）※には『佐敷同村※より来る稲福大主在所は新地、地租始めは大里南風原より来る稲福子在所は升取と言う』と記載される。また、玉城村誌（昭和52年）※には、明治初年に大城、目取真とともに大里間切に合併したとある※。

※大里村・佐敷村（後の町）・玉城村は現南城市（2006年合併）

### （2）調査

敷地北側に2か所（TP1、2）、中央に1か所（TP3）、道路際に1か所（TP4）設定し、重機による掘削および簡易磁気探査を実施した。

今回の試掘調査で確認された基本的な層序は大きく4枚で把握している。上層からI層を表土、II層は攪乱土、III層は旧耕作土、IV層は地山（鳥尻マージ）もしくは石灰岩盤である。

TP1の周辺は畑用の土留めの石積や畝状の凹凸も残存していた。TP2はTP1の西約8.5mに設定。TP3はTP2の南約6m付近の斜面上に設定。地表面の高さはTP1、2より1.4m程度低くなる。

TP1～TP3においては、III層が部分的に残存していたが、グスク時代にさかのぼる遺物包含層やIV層上面での遺構の確認はなかった。なお、砥部焼磁器や沖縄産陶器片などが溝内に落ち込んだ様相で確認しているが、採集は行っていない。TP4はTP3の南西約13m付近に設定した。地表面高さはTP3よりも低く、市道擁壁高さと同様である。II層の下はIV層の岩盤で遺構および遺物確認はなかった。このII層は南側のコンクリート製擁壁の裏込土である。



図版3① 稲福遺跡掘下げ状況 (左: TP 1北壁 右: TP 2北壁)



図版3② 稲福遺跡掘下げ状況 (左: TP 3北壁 右: TP 4南壁)



図版3③ 稲福遺跡出土遺物 (未採集) (左: TP 1 右: TP 2)



図版3④ 稲福遺跡出土遺物 (未採集) TP 3

### (3) 小結

稲福遺跡は、およそ南北440 m、東西280 mの広がりを見せるが、予備調査成果(参考含む)から、グスク時代は、第2図①B付近に集中し、時代を経るにつれて裾に移動すると想定される。

このことは、惣絵図及び測量部地形図からも推定される。

## 【参考1】第2図①C地点

調査原因：太陽光発電システム設置

調査日時：平成26年9月16日

調査職員：横山幸平

調査後の措置：工事立会

## a) 調査

調査5か所の試掘箇所（トレンチ）を設定している。

調査の結果、トレンチ①以外では遺物包含層が確認できた。トレンチ③では遺構も確認した。トレンチ②～⑤で、遺物包含層・遺構面を確認できたため、地山まで掘り切らずにその面で発掘を終了し埋戻しを行った。遺物包含層・遺構面は浅いところで、表土から60cm地点に確認できた。土層の堆積状況から太陽光発電システムを設置することが遺跡に影響を与えないと考える。

## b) 標準層序

第1層：表土。暗黒色の土層。畑の耕作土と考えられる。沖縄産陶器など近代の遺物が目立った。縮まりがない。

第2層：赤褐色の土層。沖縄産陶器など近代の遺物が目立った。地山と考えられるマージに色調が似ているが、縮まりがない。

第3層：マージと黒色土が混じる土層。かく乱により生じた層だと考えられる。鉄の棒やコーヒーの空き缶などが混入していた。

第4層：第3層と類似しているが、第3層よりも黒色が強く、赤褐色の粒や炭のようなものが混じる。青磁片などが混入している。遺物包含層である。遺構も確認できた。

第5層：赤褐色のマージ層。縮まりが強く、遺物が混入しない。地山と考えられる。



図版4① 【参考1】稲穂遺跡H26掘下げ状況（左：トレンチ① 右：トレンチ②）（南）



図版4② 【参考1】稲福遺跡H 26 掘下げ状況 (左:トレンチ③ 右:トレンチ④) (南)



図版4③ 【参考1】稲福遺跡H 26 掘下げ状況 (トレンチ⑤) (南)



図版4④ 【参考1】稲福遺跡H 26 出土遺物 (南)

### 【参考2】第2図①D地点

調査原因: 太陽光発電システム設置

調査日時: 平成 27 年 8 月 12 日

調査職員: 山里昌次 西平剛 勢理客智也

調査後の措置: 工事立会

#### a) 調査

7か所の試掘箇所 (TP) を設定している。結果は、グスク土器や青磁、沖縄産陶器、キセルの雁首等が得られたものの、どれも量的には僅少であった。遺構では TP 4～6 で炭だまりや溝状遺構が検出されたが、その時点で写真による記録に止めたため、これらの性格や帰属時期等は明らかとしない。

今調査による結果、当該地は屋敷地または耕作地等として利用された際に、全面的に攪拌され地山面まで達する箇所も認められるなど、総じて保存状態が良好とはいえない状況であった。

#### b) 標準層序

第1層: 表土。暗黒色の腐葉土。

第2層: 橙褐色土層。処々に赤褐色土を含み斑状を呈する。土質は細粒子状で粘性は弱く、層厚は約 40～80 cm 程度を測る。



第3層：赤褐色土層。基盤である島尻マージ、地山である。



図版5① 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況（左：TP 1 右：TP 2）（南）



図版5② 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況（左：TP 3 右：TP 7）（南）



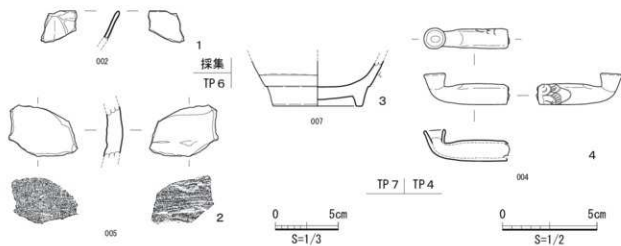
図版5③ 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況（左：TP 4 右：TP 4透構？）（南）



図版5④ 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況(左: TP 5 右: TP 5遺構?) (南)



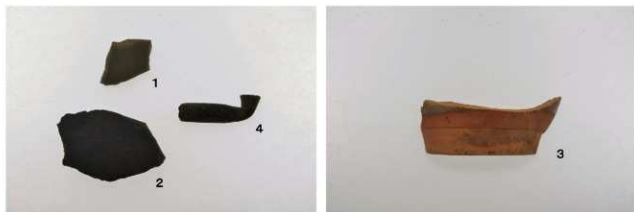
図版5⑤ 【参考2】稲福遺跡H 27掘下げ状況(左: TP 6 右: TP 6) (南)



第2図② 稲福遺跡H 26/ H 27 遺物実測図 (S=1/3)

第7表 稲福遺跡H26/H27実測遺物観察表

図番号	層	遺物	分類	観察事項	胎土混入物	色調	整理番号
第2図② 図版6 1	採集	青磁碗 口縁	大宰府 龍IV類	造形りによる縞運弁。(H26 d 調査)	灰色を呈する。(N7/O) 白色粒子が混入する。	釉薬は黄色味を帯びた暗緑色。(10Y6/1)	002
# # 2	II	カムイヤキ 胴部	伊2005 B群	内外面、回転ナゲ痕が残り、外面は削りも施される。内面には粘土帯のつなぎ目が観察される。胎土厚は1.1cmを測る。(H27 d 調査)	白色粒	灰色(N4/)	TP 6 005
# # 3	III	灰軸碗 底部		高台は逆台形状に立ち上がり高台脇から直線的に削る。釉薬は外面体部途中まで施される。内面無軸で見込みに重ね焼き痕あり。高台・内面に砂付着は見受けられない。高台外面に釉薬を施す際の指圧痕が残る。復元径7.2(残存1/2)(H27 d 調査)	—	釉薬：にぶい黄(10YR6/3)薄く、胎土の色調を反映。 胎土：浅黄橙(10YR8/3)	TP 7 007
# # 4	炭層	キセル 雁首		金属製。火皿を右に向けた側面には、線刻文が観察される。雁字との接続部分には、炭化物が残存している。雁首長4.5 火皿外径1.1(H27 d 調査)	—	—	TP 4 004



図版6 【参考1・2】稲福遺跡 H26/H27 実測遺物写真(左:1,2,4、右:3)(南)

※H26の試掘箇所名称は、本文でトレンチ①～⑥(当時)の表記で記載しているが、遺物整理の注記では、注記簡略のため、トレンチ①～⑥をそれぞれ、TP1～TP6としている。

## 第2章 予備調査の記録

第8表 稲福遺跡H 26/ H 27 出土遺物点数表

平成26年度

地山直上層

青磁	皿口縁片 無文外反(14c後半～)(1) 高台片(14c～?)(1)
陶器(沖縄)	施軸口縁片 坏?(1)

表探層

青磁	口縁片 大龍Ⅱ(1) 胴部片 大龍Ⅱ(1)
陶器(沖縄)	施軸碗片(2) 施軸胴部片(1) 無軸高台片(1) 無軸鍋縁片(1)
磁器	胴部片・鉄絵(1) 南中国? 近現代磁器片(1)

平成27年度

TP 1 2層

青磁	口縁小片(1)
炭付	胴部小片(1)
陶器(沖縄)	施軸口縁片(1) 無軸軟質土器小片(1)
磁器	近現代磁器片(1)

TP 3 2層

陶器(沖縄)	施軸遺口縁片(1)
--------	-----------

TP 4 2層

青磁	胴部小片(1) 14世紀後半～
陶器(沖縄)	無軸軟質土器高台片(1) 無軸胴部小片(1)
その他	焼土(1)

TP 4 炭層

金属製品	煙管・雁首(1)
------	----------

TP 6 2層

カムイヤキ	胴部片(1) 伊仙(2005年)B群
土器	グスク胴部片(2)内1朱??
青磁	胴部小片(1)
陶器(沖縄)	口縁片(2) 口縁小片(1) 胴部小片(1)
施軸	
陶器(沖縄)	軟質土器胴部片(1) 軟質土器鍋縁片(1)
無軸	胴部小片(1)
磁器	近現代磁器高台片(1)

TP 7 2層

陶器(沖縄)	胴部片(1) 碗高台片(1)
無軸	

TP 7 3層

陶器(沖縄)	灰輪碗底部(1)
施軸	

TP 7 表探

カムイヤキ	胴部片(1)
土器 (グスク)	胴部片(1) 小片(2)
陶器(沖縄)	無軸胴部片(1)

### 3 新里運産原遺物散布地 ※

調査地 沖縄県南城市佐敷字新里  
 調査原因 個人住宅建設  
 現地調査 平成30年8月8日～9日  
 調査面積 8㎡（対象面積約565㎡）  
 調査職員 （主任）西平剛  
 （現場担当）勢理客宣子  
 調査後の措置 慎重工事  
 ※実施時には、澤川原遺物散布地と遺跡名称を誤認していた。



第3図 新里運産原遺物散布地調査位置図（縮尺1/7500）

#### (1) 位置と環境

標高約6m前後、北側の字新開へ続く道路に接道している。南側は1959年のがけ崩れと地滑りで埋もれた御嶽群を移築した「イビの森」などを配する丘陵につながっている。測量部地形図では、平坦な土地となっている。

#### (2) 調査

開発側より提供された建設図面では、敷地北側に建物を配置する計画となっていたため、駐車場予定地となる場所に2m×2mの試掘を2か所で行った。南側をTP1、北側をTP2とした。重機掘削および深度0.5mごとの簡易磁気探査を実施している。

基本層序は4枚で把握した。I層は近年まで利用された耕作土である。II層は現代の造成土であり、ガラス片などが混入していた。III層は近世から近代の耕作土と思われ、上面は畝状を呈している。IV層は貝小破片が混入する粘質の強い土層である。遺構は確認されていない。



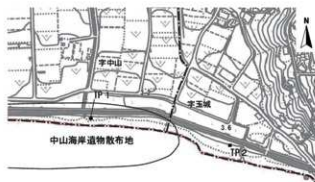
図版7 新里運産原遺物散布地掘下げ状況（左：TP1東壁 右：TP2東壁）

#### (3) 小結

遺構はなく、遺物も沖縄産陶器など小破片の確認であった。IV層の貝小破片は、陸産巻貝（キンチャクギセル）と思われた。

#### 4 中山海岸遺物散布地 ※

調査地 沖縄県南城市玉城字中山  
調査原因 導流堤浚渫工事  
現地調査 平成30年12月4日～10日  
調査面積 30㎡(対象面積約1㎡)  
調査職員 (主任) 西平剛  
(現場担当) 勢理客宣子  
調査後の措置 慎重工事



第4図① 中山海岸遺物散布地調査位置図(縮尺1/7500)

##### (1) 位置と環境

南城市役所庁舎から南側へ約3.2kmの海岸一帯が中山海岸遺物散布地である。当該地の北側は中山土地改良地区が広がり、南側はリーフが沖合1km程度に広がる。西側にある奥武島を囲むようにやや内陸に凹弧を描く砂浜となっている。

##### (2) 調査

漁業権との兼ね合いにより、標高130cm以下における掘削が不可であることが事前調整において判明した。このため、調査区設定の際、標高値を確定させておくことが必要であり、掘削予定日に先立ち、4級基準点測量を実施した。なお、潮位が下がる時間帯が朝から昼間となる日付を予定日とした。

調査区の設定は、掘削日の当日に、事前に予定されていた箇所付近で、周辺の地形および地物の位置と標高値を考慮しつつ決定し、設置した。当初雨天であったが、のち、雨は小康状態となった。

掘削は重機の侵入経路の順にTP2(東側)、TP1(西側)の順に実施し、同日埋戻しを行った。磁気探査は、表層で1回、以下0.5m毎にマグネチックローケーターを用いた簡易探査で実施した。異常反応点は見られなかった。

TP1は、開口寸法を幅5m、奥行3mで設定。掘削深度は1.6mに達したが、湧水による調査区崩落の為、途中で掘削停止した。遺物、遺構はなく、深度1.5mを超えるあたりから激しい湧水の為、掘削下面の全体状況が不明となったが、バックホウの爪が護岸の基礎部分にあたるのを確認した。土層は全て現代の白砂層堆積で、深度1.6m付近でプラスチック片等が確認出来た。少なくとも護岸工事の後に堆積した砂層と判明した。

TP2は、開口寸法を幅5m、奥行3mで設定。掘削深度は3mに達した。深度2mまでガラス片・プラスチック片等の現代遺物が確認出来た。深度2m下からは、安全面の観点から一旦掘削を停止し記録を行い、作業人員との安全距離を確保の上、重機による下層確認を行った。その結果、2.2m付近で護岸の基礎部分が確認されたため、以上の層は全て現代の白砂層堆積であることが判明した。

※(2)については業務報告に加筆

- 沖縄県漁業調整規則第39条岩礁破砕の件に関して、南部農林事務所担当課と該当せずと確認
- 奥武島漁業組合と漁業権の件で説明



図版8 中山海岸遺物散布地掘下げ状況（左：TP 1北壁 右：TP 2北壁）(南)

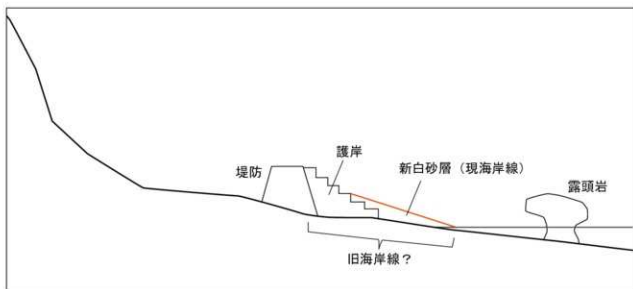
### (3) 小結

中山海岸は、東西に護岸されている。この護岸は、高さ1.5～2.0 m程度の堤防の南側に設置されており、海側に向かって砂浜に埋まるように続いている。そして、今回実施の試掘において、掘削深度2.2 mあたりで護岸の続きが確認された。これらの状況からすると、海岸に在る白砂のうち、少なくとも深度2.2 m程度までは護岸の設置後に新しく堆積した白砂層であるといえる。

当該海岸を見渡すと、海岸線から海側数メートルの位置に岩盤の露頭を見ることが出来る。

このことからすると、もともと白砂の堆積は薄かったものと考えられ、現在、海岸線に堆積する白砂のほとんどは波と共に押し寄せられた白砂が護岸の縁辺に集積したものと推測できる(第4図②)。つまり、現在の海岸線は護岸設置前のものとは位置が変位している可能性が高い。

護岸工事の基礎を設置する際の基盤面の状況および計画図等を確認できれば、当時の海岸線の位置および当初の包蔵地の範囲を改めて推定できるものと考えられる。



第4図② 旧海岸線位置想定箇所(断面)イメージ

## 5 玉城字糸数地内 ※

調査地	沖縄県南城市玉城字糸数
調査原因	沖縄気象台糸数気象レーダ局舎建替 計画及び市配水池移設計画の調整
現地調査	平成30年12月25日～1月23日
調査面積	約48㎡（対象面積約1814㎡）
調査職員	（主任）西平剛 （現場担当）勢理客宣子
調査後の措置	新規発見遺跡 記録保存



第5図① 玉城字糸数地内調査位置図（縮尺1/7500）  
破線：国指定史跡 糸数城跡

※調査終了後、令和3年2月19日付け、県文化財課へ埋蔵文化財予備調査報告（埋蔵文化財包蔵地の新規発見）を提出した。なお、近隣に太平洋戦争時の旧日本軍の陣地壕も確認されたことから、合わせて新規発見届を提出している。遺跡名称は、前者は「根石グスク周辺遺跡」、後者は「根石グスク周辺陣地壕」としている。

### （1）位置と環境

国指定史跡 糸数城跡から東へ約200mに位置する沖縄気象台糸数気象レーダ局舎敷地内（以下、糸数気象レーダ敷地内）および、その北西側に面した雑木林が今回の試掘調査対象地である。糸数気象レーダ敷地内にある北側のアメダス区域は芝が張られているが、ほとんどがコンクリート土間やアスファルトとなっている。また、北西側の雑木林内には、標高193.3mの三角地点が設置され、石灰岩岩盤が露呈する歩きづらい地形をしている。なお、この三角地点付近で旧日本軍の陣地壕を発見している。

今回の調査対象地から南側には、「根石城之嶽」と称される御嶽（拝所）があり、周辺を囲うように配されるそれほど高くない石積が所々確認できる。この御嶽についてはサナンムラの島立てとの関わりや、糸数按司が糸数グスクを築く際に仮居住した場所などと伝えられている。なお、埋蔵文化財包蔵地名称は、「根石グスク」である。一方、試掘箇所選定地周辺でも、高さ50cm程度の石垣が観察された。周辺が畑として利用された時期もあるが、遺物の破片が散布しており、かつ根石の構築状況調査などを行っていないため、根石グスクとの関わりは否定できない。

### （2）調査

#### 試掘箇所選定および設置

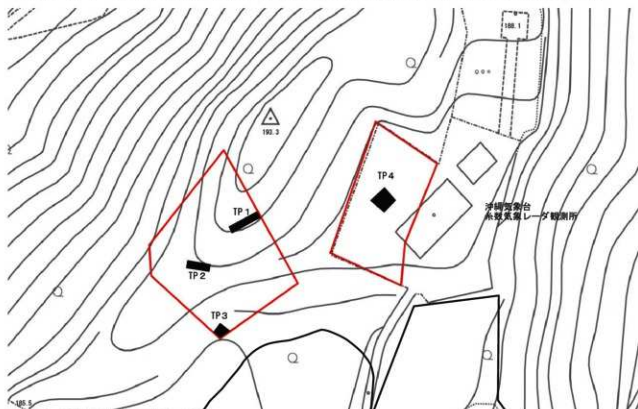
TP1～TP3は雑木林内であり、数回の踏査では十分な伐採は行えず、視界は悪かったが、傾斜地形や石灰岩が溝状にくぼむ地形、平地地形の3か所を試掘箇所として選定した。試掘調査の際に、傾斜地形に予定したTP1は、現地調整で1.5m×9.3mでトレンチ、溝状地形で予定したTP2も同様に1.5m×6.0mのトレンチを設定した。平地地形に予定したTP3は予定通り3.0m×3.0mで設定した。

TP4は糸数気象レーダ敷地内を予定しており、沖縄気象台職員に局舎建替予定位置を示してもらい、その枠内で、4.0m×4.0m（舗装材撤去範囲は4.5m×4.5m）で設定した。

TP1～TP3は、人力による掘削作業、TP4は舗装材を撤去し、重機掘削で掘り下げを行った。



なお、TP 1～TP 3の調査対象地は袋地であり、進入路確保のため許可をとり実施している。



第5図② 試掘箇所位置図（縮尺1/1000）

## 結果

### ① TP 1（第5図②および③、第11表）

TP 1は、北東から南西にかけて緩やかに傾斜する地形に1.5m×9.3mで設定。基本層序は3層で把握している。Ⅰ層が腐葉土、Ⅱ層が堆積層で上部の礫混じり土と傾斜面の堆積土と分層可能である。Ⅲ層はⅡ層と類似するが、土の明度で分層している。掘削をすすめると、露出する石灰岩岩盤がほぼ平坦に整形され、段状（3段？）を呈しているように見えた※。堆積土からは遺物は出土していないが、石灰岩岩盤のホール内覆土からグスク土器1点のみが出土している。往時の堆積によるか、後世の自然環境によるもの（例：樹木根による潜り込み等）かは定かではない。

※沖縄県恩納村の山田城跡の調査に類例（恩納村博物館 令和3年度 恩納村文化財普及事業 発掘調査速報展図録「山田城跡重要遺構確認調査 TP 8」(P15)）。

### ② TP 2（第5図②および④、第10表・第11表）

TP 2は、TP 1から南西側約15m地点に1.5m×6.0mで設定。比較的平坦な場所であるが、トレンチ西側には南北に延びる石灰岩岩盤の溝状地形があり、幅約1.0mとなっている。一部で行った表面観察では自然にできた溝と思われた。この溝状内とトレンチ東側の基本層序は分けている。溝状地形内は7層であり、「切」の文字をアラビア数字の前に入れている。切Ⅰ層は腐葉土、切Ⅱ層～Ⅲ層は遺物包含土であるが、切Ⅱ層は沖縄産陶器が出土していることから、流れ込みの影響を受けていると判断した。切Ⅳ～Ⅶ層は無遺物土である。東側は4層であり、Ⅰ層が腐葉土、Ⅱ層が遺物包含土、Ⅲ・Ⅳ層が無遺物土である。

## 第2章 予備調査の記録

トレンチ東側の平坦地形には石灰岩岩盤の露頭があり、その合間の堆積土から遺物が出土しているが、遺構と目される痕跡は確認できなかった。一方、西側の溝状地形は、その延長が南北へ伸び旧日本軍の陣地壕（新発見）へと繋がる様相が確認できたため、散兵壕の一部と思われた。しかしながら、堆積土からはグスク土器やカムイヤキなど時期がまとまる遺物が出土している。

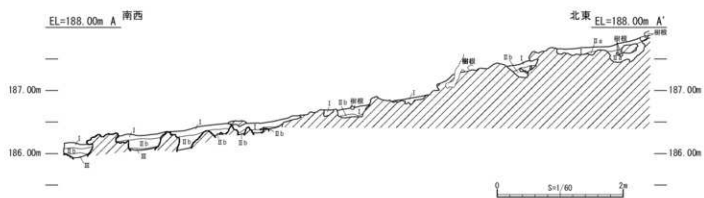
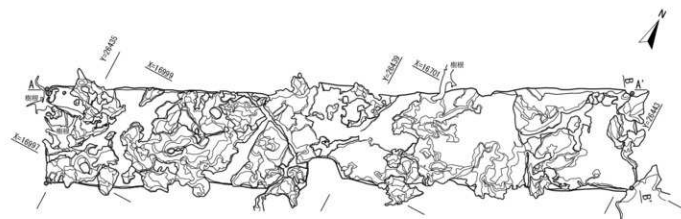
### ③ TP 3（第5図②および⑤、第9表・第10表・第11表）

TP 3では、比較的平坦な地形であり、関係者から畑をしていたことを聞き取りしている。基本層序は5層である。Ⅰ層は腐葉土、Ⅱ・Ⅲ層は遺物包含土、Ⅳ層は遺構掘り込み面、Ⅴ層は遺構確認面（地山）である。表土では小片の遺物散布が見られたため、ショベルによる掘削を行った。鉄片とともに、グスク土器などが混ざる堆積土（Ⅱ層）が確認されたが、戦後、畑をしていたという聞き取りから、その際に攪拌されていると考えられた。20 cm程度掘り進めると円形状の黒褐色部が確認された。攪拌された堆積土下からであるが、遺物の出土様相から、グスク時代に関わる遺構と判断した。その深さで掘り下げているところ、南西側に黒味のある堆積土（Ⅲ層）が検出された。層位は薄く、5 cm程度であった。畑の攪拌を免れたプライマリーな遺物包含土と考えられる。遺構の検出作業を行って、記録をとった後に白砂を撒いて埋め戻しを行った。検出された遺構は、30基あり、Sを番号頭に付しS1～S30とした。これらの遺構は、半裁せず表面で観察できる覆土や混入物（炭や焼土、土器片）などを記録している。

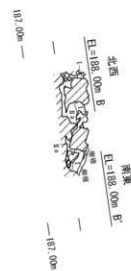
内容は第9表のとおりである。

第9表 TP 3遺構覆土観察表（検出面）

遺構 No	表面色調	土色 (Hue 省く)	混入物	備考	遺構 No	表面色調	土色 (Hue 省く)	混入物	備考
S 1	黒褐色 褐色混	5YR3/1 5YR5/8			S16	黒褐色 褐色混	5YR3/1 5YR5/8		中央黒味強い
S 2	#	#			S17	#	#		#
S 3	#	#			S18	黒褐色	5YR3/1	炭・焼 土・土 器片	
S 4	#	#			S19	黒褐色 褐色混	5YR3/1 5YR5/8		
S 5	黒褐色	5YR3/1	炭・焼土		S20	#	#		中央黒味強い
S 6	黒褐色 褐色混	5YR3/1 5YR5/8			S21	#	#		#
S 7	#	#			S22	#	#		
S 8	#	#		中央黒味強い	S23	黒褐色	5YR3/1	炭・焼 土	
S 9	#	#		石灰岩露出	S24	#	#	#	
S10	#	#			S25	#	#	#	
S11	#	#			S26	#	#	#	
S12	やや黄灰色	10YR3/3			S27	黒褐色 褐色混	5YR3/1 5YR5/8		
S13	黒褐色	5YR3/1	炭・焼土	石灰岩露出	S28	#	#		
S14	#	#	#		S29	黒褐色	5YR3/1	炭・焼 土・土 器片	
S15	黒褐色 褐色混	5YR3/1 5YR5/8			S30	#	#	#	



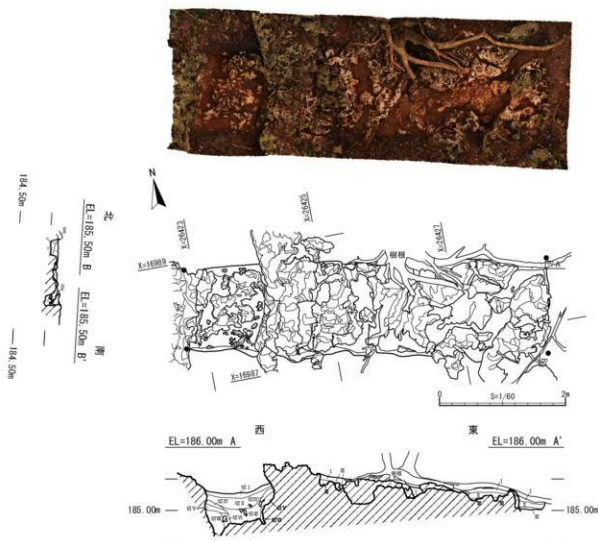
第5図③ 玉城宇糸敷地内 TP 1 (S=1/60)



TP 1

層位	色	土色	土質	混入物	備考
I層	腐葉土	黒色	-	-	-
II a 層	雑草じり土	黒褐色	-	軟らかい	礎 上部北西部のみに確認された
II b 層	無遺物土	茶褐色	Hu5YR4/8	しまりや やが弱い	IV層よりやが弱みあり (TP 2 上部層寄類似)
III層	無遺物土 (地山)	明褐色	Hu5YR3/8	しまりあり	岩盤内塵土より土器片出土 (TP 2 上部II層に類似)
-	遺物包含層	にぶい 黄褐色	Hu10YR3/4	やが軟らかい	-





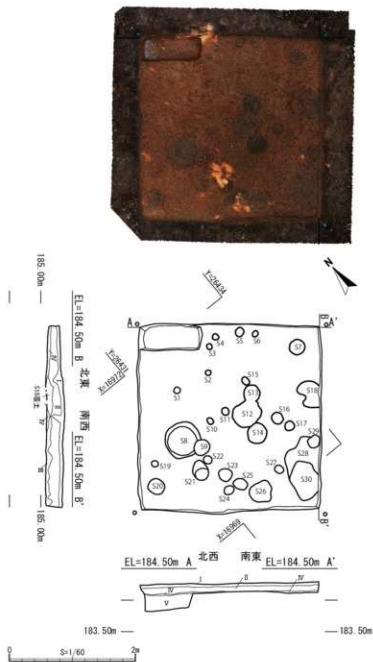
TP 2 溝状箇所

層位		色	土色	土質	混入物	備考
I層	腐葉土	黒色	-	-	-	
II層	流れ込み土	やや明るい黒褐色	Hue5YR1/3	やや軟らかい	-	
III層	遺物包含土	やや明るい黒褐色	Hue5YR1/3	やや軟らかい	焼土・土器小片 含む	縦紋あり
IV層	無遺物土	にぶい黄褐色	Hue10YR3/4	やや軟らかい	-	色合が上部II層に類似
V層	無遺物土	茶褐色	Hue5YR4/8	しまりやや弱い	-	色合が上部III層に類似
VI層	無遺物土	暗褐色	Hue5YR2/4	軟らかい	-	VII層がIII層の影響で黒味を帯びた と思われる やや赤みが分かる
VII層	無遺物土(地山)	明褐色	Hue5YR5/8	しまりあり	-	岩盤露出あり

TP 2 上部

層位		色	土色	土質	混入物	備考
I層	腐葉土	黒色	-	-	-	
II層	流れ込み土	にぶい黄褐色	Hue10YR1/3	やや軟らかい	-	
III層	無遺物土	茶褐色	Hue5YR4/8	しまりやや弱い	-	IV層よりやや暗みあり
IV層	無遺物土(地山)	明褐色	Hue5YR5/8	しまりあり	-	

第5図④ 玉城字永敷地内 TP 2 (S=1/60)



TP 3 ①

層位		色	土色	土質	混入物	備考
I層	腐葉土	黒色	huc5YR2/1	—	—	
II層	遺物包含土	にぶい茶褐色	huc5YR4/3	やや軟らかい	—	遺物破片小さめ
III層	遺物包含土	茶褐色	huc5YR3/2	ややしまり有	焼土・炭混じり	遺物破片比較的大きめ
IV層	遺物埋り込み面	明褐色	huc5YR5/8	ややしまり有	—	生活面?若干黒褐色土が混ざる
V層	遺構確認面(地山)	明褐色	huc5YR5/8	しまりあり	—	

第5図⑤ 玉城字糸敷地内 TP 3 (S=1/60) その1

TP 3 遺構覆土（検出面）②

遺構 No.	色	土色	土質	備考
S 1	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S 2	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S 3	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S 4	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S 5	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土含む	
S 6	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S 7	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S 8	掘り方があるか?	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		中央黒味濃い
S 9	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		石灰岩露出
S10	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S11	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S12	やや黄灰色	Hae10YR3/3		
S13	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土含む	石灰岩露出
S14	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土含む	
S15	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S16	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		中央黒味濃い
S17	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		中央黒味濃い
S18	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土・土器片含む	
S19	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S20	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		中央黒味濃い
S21	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		中央黒味濃い
S22	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S23	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土含む	
S24	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土含む	
S25	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土含む	
S26	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土含む	
S27	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S28	黒褐色・褐色混ざり	Hae5YR3/1, Hae5YR5/8		
S29	黒褐色土	Hae5YR3/1	炭・焼土・土器片含む	
S30	黒褐色土	Hae5Y/1	炭・焼土・土器片含む	

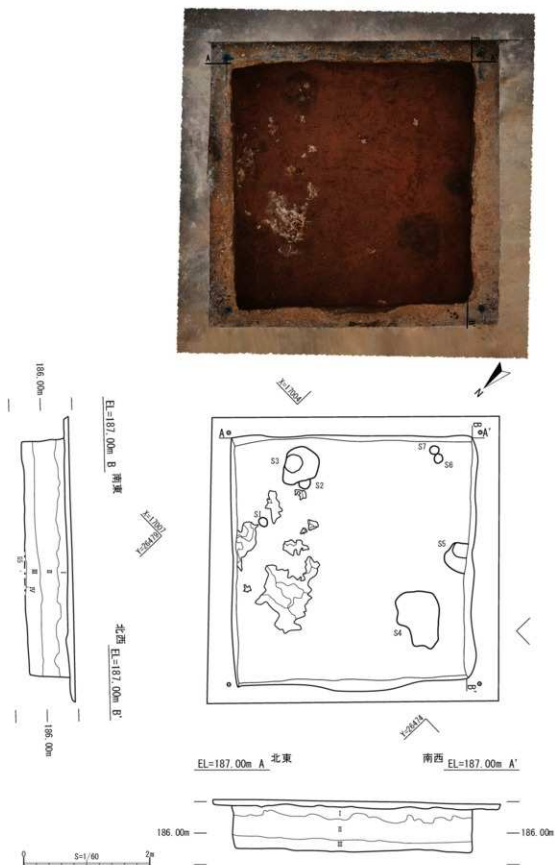
第5図⑤ 玉城宇糸敷地内 TP 3 (S=1/60) その2

## ④ TP 4 (第5図②および⑥、第10表・第11表)

TP 4は、糸敷気象レーダ敷地内となっている。基本層序は舗装材を除く3層である。既存建物の造成土（Ⅰ・Ⅱ層）が約60cm程度あり、その下から粘質土（Ⅲ層）が現れた。Ⅲ層は暗褐色でやや軟らかいシルト質であり、マンガンや焼土・炭のほか、1cm程度の礫を微量に含む。地山（新里層）の風化土と思ったが、20cm程度掘り下げると円形状の黒褐色土まじり箇所が現れた。重機掘削では遺物包含層の確認ができていなかったが、改めて掘削土を確認すると僅かにグスク土器が採集された。そこで、グスク時代にかかる遺構の可能性を考えたため、遺構検出作業を行い、記録を作成後、上層にあったコーラルを入れて埋め戻しを行っている。

検出された遺構は、7基あり、Sを番号頭に付しS1～S7とした。これらの遺構はTP3と同様に半截せず、表面で観察できる覆土や混入物（炭や焼土、土器片）などを記録している。

なお、当該試掘箇所は記録保存を行い、既に報告書が刊行されている。その報告書と本記録の遺構の覆土観察事項については、観察状況など異なるため掲載内容は異なっている。



第5図⑥ 玉城字糸敷地内 TP 4 (S=1/60) その1



## TP 4 ①

層位		色	土色	土質	混入物	備考
I層	造成土(砂礫)	淡黄色	Bae2.5YR8/4	—	礫を多数含む	
II層	造成土 (クチャ土)	灰色・黄灰色等 混ざり	Bae2.5YR6/1, Bae2.5Y7/6	ややしまりあり・ シルト質		
III層	遺物包含土	暗褐色	Bae6YR5/8	やや軟らかい・ シルト質	マンガンや焼土・炭 のほか、1cm程度の 礫を微量に含む	層中に黄褐色(Bae10YR8/3) が一部層をなしていたが、流 水影響と判断して、固化してい ない
IV層	遺構確認面 (地山)	明褐色	Bae6YR5/8	しまりあり		一部、マンダンの影響で茶色 味を帯びる

## TP 4 遺構覆土(検出面) ②

層位		色	土色	混入物	備考
S 1		茶褐色	Bae5YR2/3	1mm程度の焼土・炭を含む	S 2類似
S 2		茶褐色	Bae5YR2/3	1mm程度の焼土・炭を含む	S 1類似
S 3	柱状跡	褐色	Bae5YR2/3に近い色	—	S 5とブランつながるか？
	柱間方	黒褐色	Bae5YR2/3に近い色	1～3mm程度の焼土・炭を含む 土器の破片含む	
S 4		黒褐色	Bae6YR5/8に近い色	1～3mm程度の焼土・炭を含む	
S 5	柱状跡	褐色	Bae6YR5/8に近い色	—	S 3とブランつながるか？
	柱間方	黒褐色	Bae5YR2/3に近い色	1～3mm程度の焼土・炭を含む 土器の破片含む	
S 6		明褐色と黒褐色 混ざり	Bae5YR2/3と Bae6YR5/8が混在		III層残存可能性
S 7		明褐色と黒褐色 混ざり	Bae5YR2/3と Bae6YR5/8が混在		III層残存可能性

第5図⑥ 玉城字系敷地内 TP 4 (S=1/60) その2



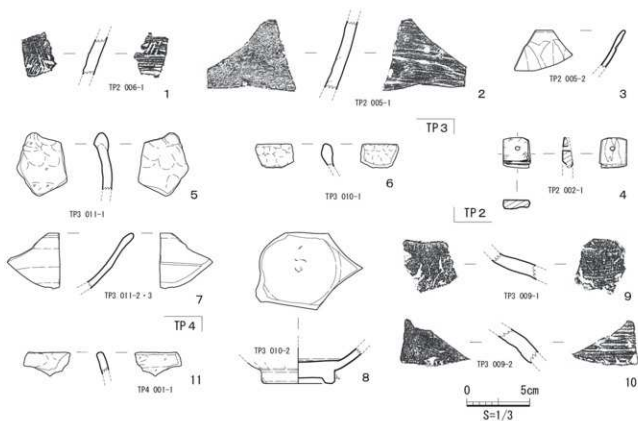
図版9① 玉城字系敷地内遺構面検出状況(左:TP 1北東より 右:TP 3北西より)



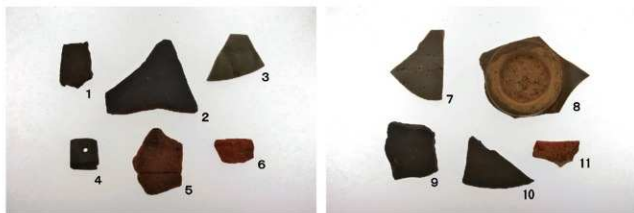
図版9② 玉城字系敷地内遺構面検出状況(左:TP 2西より 右:TP 2堀切?部分 北より)



図版9③ 玉城字糸敷地内遺構面核出状況 TP4 北より



第5図⑦ 玉城字糸敷地内 遺物実測図 (S=1/3)



図版9④ 玉城字糸敷地内 実測遺物写真(左:1~6 右:7~11)(南)

第10表 玉城字糸敷地内 実測遺物観察表

図番号	層	遺物	分類	観察事項	胎土混入物	色調	整理番号
第5図⑦ 図版9④ 1	II	カムイ ヤキ 胴部	伊(2005) B群	器厚10mm程度。内面は当て具痕(線状)や道具によるナゲ成形。外面は叩き痕(線状)が残るが、平滑に成形。	1mm以下の白色粒・褐色粒(少量)	胎:褐色 (7.5YR4/3)	006-1 TP 2
2	切II	カムイ ヤキ 胴部	伊(2005) B群	器厚10mm程度。内面は積目跡が残る。外面は削りが観察される。	1mm以下の白色粒 (極少量)	胎:褐色 (7.5YR4/4)	005-1 TP 2
3	#	青磁碗 口縁	大宰府 館II b 類	外面に片切削りの鍔蓮弁文。	—	胎:灰白色 (7.5YR8/1) 軸:オリーブ灰 (2.5G6/1)	005-2 TP 2
4	排土	石製品		2cm角の残存部。やや中央に穴が穿たれる。全体磨った痕が観察される。二次利用?	—	灰色(N4/)	002-1 TP 2
5	III	グスク 土器 口 縁 銅	糸敷 (1991) 銅I C 瘤あり	胴部から内側にすばまる器形をしている。口縁は舌状に整形され、瘤状の突起を中心に傾斜する。内外面ともエピソード後、ナゲ調整。※S12付近のIII層	1mm以下の白色粒・ 灰色粒・黒色粒 アバタ状、ザラツ キあり	胎:橙 (5YR7/8)	011-1 TP 3
6	#	グスク 土器 口 縁	糸敷 (1991) 壺C?	内外面に指オサエ痕が観察出来る。口唇は平坦に仕上げられる。※S30付近堆積層	1~3mm大の白色粒。 アバタ状、ザラツ キあり	胎:橙 (2.5YR6/8)	010-1 TP 3
7	#	白磁碗 口縁	大宰府C 浅型・外反 OR 大宰府 V?	器形は逆ハ字状に開き、口縁内側下に若干屈曲をもってさらに外へ開く。胴部外面には、内面胴部に沈線に対するように削りの痕が明瞭に残る。 ※S12付近堆積層	1mm以下の黒色粒 など。	胎:灰白 (7/) 軸:明オリーブ灰 (5G7/1)	011-2 ・3 TP 3
8	#	青磁碗 底部	大宰府 館II b	内底は平坦に仕上げられ、腰部から逆ハ字状に胴部が立ちあがる。底部は厚く、高台は方形状に近く匙付け両端を面取りする。内底に文様あり。外面は鍔蓮弁が確認できる。復元径6.4(残存1/1) ※S30付近堆積層	—	胎:浅黄緑 (10YR8/3)	010-2 TP 3
9	II	カムイ ヤキ 頸 部付近 壺	伊(2005) B群	器厚10mmを図る。内外面とも平滑なナゲが観察される。	1mm以下の白色粒 (極少量)	胎:灰 (N5/)	009-1 TP 3
10	#	カムイ ヤキ 胴 部	伊(2005) B群	器厚10mmを図る。内面は道具によるナゲ、外面は平滑なナゲ成形。二次使用と思われる擦り跡が側面に残る。	1mm以下の白色粒 (極少量)	胎:灰 (N4/)	009-2 TP 3
11	排土	グスク 土器 口縁	糸敷 (1991) 銅I類	内面はヨコナゲで成形する。外面は指オサエのちナゲと思われる。	1~3mm程度の黒 色粒、褐色粒、灰 色粒などを含む	胎:橙 (7.5YR6/6)	001-1 TP 4

## 第2章 予備調査の記録

第11表 玉城字糸敷地内 出土遺物点数表

TP 1 岩盤覆土→Ⅲ?層

グスク土器	胴部片 (1)
-------	---------

TP 2 Ⅱ層

カムイヤキ	胴部片 伊B群 (2)
グスク土器	底部片 糸Ⅰ (1) 底部? (1) 胴部片 (2) 胴部小片 (10)
青磁碗	大籠Ⅰ胴部片 (1) 大籠Ⅱ口縁片 (1)
陶器 (沖縄)	有文胴部片 (1)
その他	焼土混在

TP 2 切Ⅱ層

カムイヤキ	胴部片 伊B群 (1)
グスク土器	底部片 糸Ⅰ×Ⅱ (1) 底部片 (1) 胴部片 (8) 胴部小片 (4)
青磁碗	口縁片 大籠Ⅱb (1)
白磁	胴部片 袋物 (1)
その他	獣骨片

TP 2 排土

グスク土器	胴部片 (2)
石製品	砥石片 (1)

TP 3 Ⅱ層

カムイヤキ	胴部片 伊B群 (2)
グスク土器	口縁片 糸鍋Ⅱ a×b (1) 胴部片 (6) 胴部片 滑石粒入 (1) 底部片? (1) 胴部小片 (5)
縄輪陶器	胴部片 (1)
その他	鉄片混在

TP 3 Ⅲ層 (S30 および S12 付近)

グスク土器	こぶ状口縁片 糸鍋Ⅰc (1) 口縁片 糸壺C? (1) 口縁片? 滑石粒入り (1) 底部片 糸Ⅲ (1) 底部片 糸Ⅰ (1) 底部片 糸Ⅰ×Ⅱ (1) 胴部片 (10) 胴部片 滑石粒入 (1)
白磁碗	口縁~腰部片 森C群2 (外反) (1)
青磁碗	大Ⅱ (1) 底部 大Ⅳイ×Ⅱ (1)
青磁片	胴部片 大Ⅳ時期 (1)
陶器 (沖縄)	灰輪碗腰部片 (1)

TP 4 排土

グスク土器	口縁片 糸鍋Ⅰa (1) 胴部片 (1)
-------	----------------------

### (3) 小結

TP 1～TP 4では、遺構の確認があったが、トレンチ設定のため、全体的な遺跡像につなげるものではなかった。今後、調査の必要が生じた場合に、その遺跡像は明確になると思うが、当面は、現地保存ということになる。ただし、TP 4の糸数気象レーダ敷地内については、建物の建て替えは決定事項であるので、記録保存での調整を行っている。

遺跡の年代観について、調査区が東西約60m、南北約45mの範囲に広がるが、ひとつのエリアとして遺物の組成感に検討を加える。

TP 2で検出された西側溝状地形内の切Ⅱ層は、北側から南側に傾斜していることから、流水による流れ込み影響を考えられたが、東側のⅡ層を比較してみると、さほど影響はないものと捉えられ、グスク土器と青磁碗Ⅱ類、カムイヤキB群の組成時期と判断される。また、TP 3においては、遺構が検出され、上面の包含層Ⅲ層は、青磁碗Ⅱ類とともに、こぶ状口縁や滑石粒入りグスク土器が見受けられた。TP 1の出土遺物はグスク土器1点のみである。また、TP 4では排出土からのグスク土器片を採集している。

このことから、この一帯においては、グスク土器と青磁Ⅱ類、カムイヤキB群の組成を主とする遺跡が広がっており、TP 4の位置する糸数気象レーダ敷地内もその範囲と捉えることが可能である。

年代観は沖縄県立埋蔵文化財センター紀要Vを参考にすると、外来遺物を主とみた場合は、Ⅲ期（13世紀後半～14世紀前半）、在地土器に滑石粒入り胴部、滑石製石鍋の把手が退化した瘤状があることから、Ⅱ期（12世紀半ば～13世紀前半）の範疇にも入る。

※本報告書刊行前に、先行して沖縄県南城市文化財調査報告書第21集「根石グスク周辺遺跡－沖縄気象台糸数気象レーダ局舎建替工事に伴う発掘調査報告書－」2023年2月が刊行されている。

今回の試掘箇所であるTP 4の結果に伴う記録保存調査報告書であり、本試掘報告と年代的把握にずれが生じている。これは資料数などの差異によるものである。TP 4周辺の遺跡様相は記録保存調査報告書を参考いただきたいが、本内容は試掘時点での検討内容であるため、そのまま記載しておく。

#### ※関係法令手続き

絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律第54条第2項の規定に基づき、国内希少野生動植物種（緊急指定種）の個体の捕獲等に関する協議

対象：クロイワトカゲモドキ、イボイモリ

## 6 玉城字船越地内 ※

調査地 沖縄県南城市玉城字船越  
調査原因 市道大城船越線新設工事  
現地調査 平成30年12月11日～12月13日  
調査面積 32㎡（対象面積約1,679㎡）  
調査職員 （主任）西平剛  
（現場担当）勢理客宣子

調査後の措置 慎重工事

※船越グスクと船越遺跡の重複のため、船越地内としている。



第6図 玉城字船越地内調査位置図（縮尺1/7500）  
破線：市指定史跡、船越グスク

### (1) 位置と環境

調査対象地は、西側に船越グスク、北側は船越遺跡に接する市道船越大城線の計画地の一部である。東側約50m上の台地には糸数集落、そのさらに約25m上の台地に国指定史跡 糸数城跡が位置している。

この地域の表記「船越」は、戦前まで「富名腰」と表記されていたことが、測量部地図より確認でき、当時の集落は、ほぼ現位置と変わらない。遺跡内には、富名腰集落の伝承を伝える拝所※が多数残り、現在でも区長をはじめとして村拝みが行われている。

※琉球国由来記（1713年）で名称が確認できる拝所だが、近年、移築された拝所もある。

### (2) 調査

新設予定道路の中心線を目安に岩盤や建物などがあった場所を避けて、10mおきを目安に2m×2mの試掘坑を設定し、名称を北側から南側へTP1～TP8とした。バックホウによる除去作業後、記録作成等人力による作業を実施した。

TP1～TP4は船越グスクに隣接しているが、現代の造成土が地山まで堆積しており、遺物包含層や遺構面は確認されなかった。

TP5は現代の造成土が深度2m地点まで、TP6は深度約1.3mで岩盤を確認したが、その上面は現代の造成土が堆積していた。

TP7～TP8は船越グスクの東側、標高約96mを測る。第1層の厚さ約40cmの耕作土以下に遺物包含層や遺構面は確認されなかった。

### (3) 小結

船越グスクに隣接するものの、グスクにかかわる遺構・遺物は皆無であった。



図版 10 ① 船越地内掘下げ状況 (左: TP 1 北壁 右: TP 2 西壁)



図版 10 ② 船越地内掘下げ状況 (左: TP 3 西壁 右: TP 4 北壁)



図版 10 ③ 船越地内掘下げ状況 (左: TP 5 北壁 右: TP 6 西壁)



図版 10 ④ 船越地内掘下げ状況 (左: TP 7 東壁 右: TP 8 西壁)

## 7 仲村渠殿遺跡 ※

調査地 沖縄県南城市玉城字仲村渠

調査原因 個人住宅建設

現地調査 平成30年12月4日

調査面積 6㎡（対象面積約275㎡）

調査職員 （主任）西平剛

（現場担当）勢理客宣子

調査後の措置 本調査（第3章で記載）

※「仲村渠遺物散布地」と誤認しており、整理・報告時に修正。



第7図 仲村渠殿遺跡調査位置図（縮尺 1/7500）

### (1) 位置と環境

市の東側、標高約120mの丘陵辺縁に位置する。周辺には県指定史跡「垣花城跡」や「ミントングスク」などのグスクや「仲村渠集落内遺物散布地」、「仲村渠貝塚」などがある。

### (2) 調査

試掘坑（2m×2m）の掘削を実施したところ、開始早々、石灰岩面となったため、南西側へ3mずらし掘削を継続した。土面での石灰岩露頭となったところで、人力作業を実施した。

基本層序は第1層が表土、第2層が褐色土の遺物包含土、第3層が褐色土の遺構埋土、第4層は明褐色土の遺構検出面である。検出された遺構は小穴2基、土坑1基であった。

遺物は第2層でグスク土器片が採集されている。



図版 11 ① 仲村渠殿遺跡出土遺物

### (3) 小結

遺構が確認された。表面観察による覆土には炭化物片や焼土塊などが含まれる。



図版 11 ② 仲村渠殿遺跡掘下げ状況（左：堆積層状況（ライン入り） 右：遺構検出状況）



## 8 下代原遺跡

調査地 沖縄県南城市佐敷字佐敷  
 調査原因 個人住宅建設  
 現地調査 令和元年5月23日  
 調査面積 8㎡（対象面積約312㎡）  
 調査職員 （主任）西平剛  
 （現場担当）勢理客宣子  
 調査後の措置 慎重工事



第8図 下代原遺跡調査位置図（縮尺 1/7500）  
 破線：国指定史跡 佐敷城跡

## (1) 位置と環境

佐敷地区の中央にある佐敷小学校南側の標高約18m前後に広がる下代原遺跡内に位置する。さらに東側には佐敷上グスク（国指定史跡名称 佐敷城跡）が確認されている。

## (2) 調査

試掘箇所を北側から2か所、2m×2mでTP1、TP2を設定。境界杭より簡易計測で調査箇所を測定、標高は地表面を0とした。TP1、TP2は深度約1.5mで湧水があった。ともに造成土（埋土）のみであったが、湧水のため一旦、記録作成（実測・写真）を行った。その後、確認で地表より2m掘り下げたところ、TP2では地山層である粘土質層を検出している。

遺構は確認されず、遺物の出土もなかった。

## (3) 小結

特に遺構は確認されていない。本調査地から東へ約70m付近では小学校改築にかかる遺跡の記録保存調査が行われ、鍛冶関連遺物（鑪の羽口など）が確認されている。この調査地では、遺物・遺構の確認はなかったものの、遺跡の範囲を検討する要素となる。



図版12 下代原遺跡掘下げ状況（左：TP1 右：TP2）

### 9 手登根島之上原遺物散布地

調査地 沖縄県南城市佐敷字手登根  
調査原因 個人住宅建設のため  
現地調査 令和元年5月30日  
調査面積 8㎡(対象範囲約396㎡)  
調査職員 (主任)西平剛  
(現場担当)勢理客宣子  
調査後の措置 慎重工事



第9図 手登根島之上原遺物散布地調査位置図(縮尺1/7500)

#### (1) 位置と環境

同章1に近接する場所で、その箇所から西南側へ約110m離れた地点にある。

#### (2) 調査

調査区2か所を設定し、境界杭より位置測定を行った。敷地南西側は傾斜面で土地改変は行わないことから、対象区域から外している。標高は任意でとっている。道路側からTP1、TP2と付している。重機による掘削を行い、TP1では深度1.5m程度で黄灰色粘質土(泥岩風化土?)が検出された。地山風化土と思われたが、沖縄産陶器片が採集され、木の根の痕跡がないことから、根の伸長によるものとは考えられなかった。TP2では炭化した木材など、燃やした後のガラが入った造成土の下、深度約1.5mで、地山が検出された。記録作成の後、タンパー転圧による埋め戻しを行っている。

#### (3) 小結

本調査箇所は、同章1【参考】に記載した箇所と同様に、黄灰色粘質土面から上は、ほぼ盛土となっている。



図版13 手登根島之上原遺物散布地掘下げ状況(左:TP1北壁 右:TP2東壁)(南)

## 10 久手堅地内

調査地	沖縄県南城市知念字久手堅
調査原因	駐車場整備
現地調査	令和元年7月10日
調査面積	2㎡(対象範囲約100㎡)
調査職員	(主任)西平剛 (現場担当)勢理客宣子
調査後の措置	慎重工事



第10図 久手堅地内調査位置図(縮尺1/7500)

## (1) 位置と環境

市の東南側にある斎場御嶽から約600m南側、海に舌状に突出した標高約70m丘陵上に位置する。周辺は公共施設工事などにより造成が行われ、残った林の一部が今回の調査地となっている。この残った林は道路から約10m程度の高さがあり、その内部には旧日本軍の陣地壕や、時代不明の石積が確認されている。また、付近には「ウフグスク」があったとされているが、範囲は不明である。

## (2) 調査

対象範囲は、施工業者が現地で提示した駐車場整備で影響を受ける範囲である。隣接する社会教育施設の屋外トイレの犬走ラインから、試掘位置を測定し、任意標高として、歩道緑石上に0地点を設けている。対象区域内の北側をTP1、南側をTP2としている。

1m×1mの2か所で人力掘削を実施した。深さ0.3m～0.4m程度まで掘り進めても、遺物の確認はできなかった。また、岩盤が露出し、基本層序は3層である。I層は腐葉土、II層は褐色土で炭を微量に含み、5mm程度の石灰岩礫を少量含む。III層は黄褐色土で、岩盤露頭が多くなる。III層は無遺物であり遺構がないため、記録作成を実施した。

## (3) 小結

本調査地は、「ウフグスク」に推定される箇所に隣接するが、関連を示すような遺物や遺構は確認できなかった。また、周辺の旧日本軍の陣地壕などに関連する遺物も皆無であった。



図版14 久手堅地内掘下げ状況(左:TP1南壁 右:TP2南壁)

## 11 真境名遺跡

調査地	沖縄県南城市大里字稲嶺
調査原因	倉庫など建設
現地調査	令和元年9月24日～10月4日
調査面積	約92㎡(対象面積約3,295㎡)
調査職員	(主任)西平剛 (現場担当)勢理客宣子
調査後の措置	慎重工事



第11図① 真境名遺跡調査位置図(縮尺1/7500)

### (1) 位置と環境

南城市役所から東側へ延びる市道沿いにある。市役所から北西側約1.4kmの標高約140mにあり、市道を挟んだ南東側には、稲福遺跡(山グスク)がある。対象敷地内の東側には、石灰岩盤の小丘があり、以前は「カタカシラー※」と称される形をしていたが、平成5年に掘削されている。なお、琉球国由来記に記載はないが、現在は真境名区が拝みを行っている。

※カタカシラーとは、琉球王国時代の武士の髪型

### (2) 調査

対象地の範囲は、東西に約45m、南北に約110mである。世界測地系座標 $X = 19250.00000$ 、 $Y = 25940.00000$ を基準にグリッドを設置している。なお、グリッド間は20mを目安にしているが、現地調整や掘下げ後の再計測でずれが生じている。グリッドの面積は $3\text{m} \times 3\text{m}$ を基本とし、小丘の西側にある石垣下の確認で $1\text{m} \times 2\text{m}$ のトレンチも設定した。トレンチは南側からTP1、2とし、TP10まで設定し、追加確認のためTP3とTP5の間に1か所、 $3\text{m} \times 3\text{m}$ で設定した。

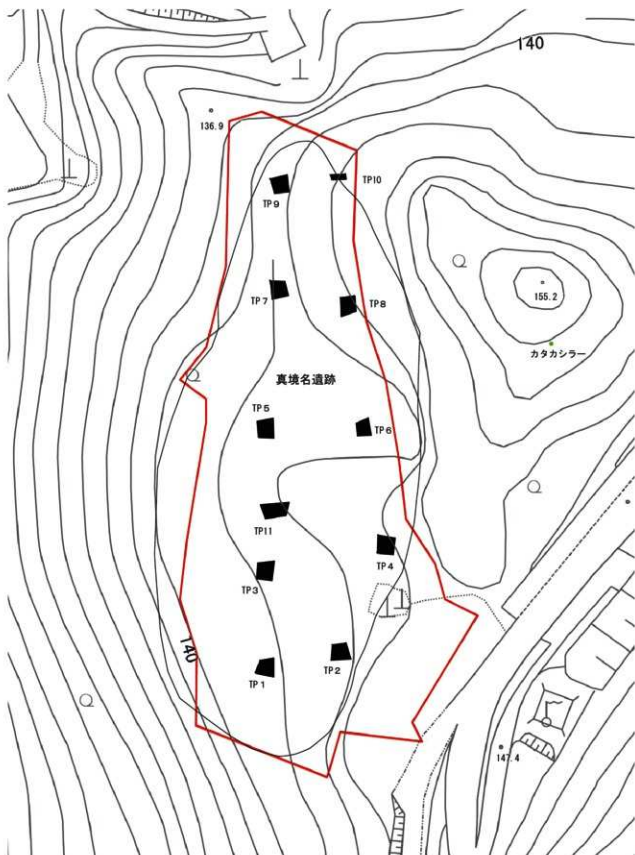
層序はTP毎に層序番号を付しているため、報告書作成段階で、統一の基本層序を設定している。

基本層序は、6層確認されている。I層は表土、II層は造成土、III層は旧表土、IV層は耕作土、V層は無遺物層、VI層は地山である。

重機により掘削作業を行ったが、TP4～10では造成土を確認している。TP4は傾斜面地で2m掘り下げても、造成土は深く変化はなかった。TP5～8は深度0.5～1.5m程度で岩盤が確認された。TP9、10では、1mほど掘下げた段階で、造成時に入れた石灰岩礫が多数出土した。用意した重機では掘下げが不可であったため掘削を終了している。

TP1～3では沖縄産陶器片などが僅かにみられ、褐色や橙色シルト土が2～5cm程度のブロック状に攪拌される様相を呈していたため、耕作(IV層)の痕跡と判断した。なお、TP3では地山面やや黒味を帯びる円形状の部分が確認されたため、遺構の可能性を考慮し記録を作成した。

主な出土遺物はTP1のIV層からグスク土器小片1点、TP2のII層から沖縄産陶器が4片確認されている。



第11図② 真境名遺跡試掘箇所位置図 (縮尺 1/800)



図版 15 ① 真境名遺跡掘下げ状況（左：TP 1 南壁 右：TP 2 南壁）



図版 15 ② 真境名遺跡掘下げ状況（左：TP 3 北壁 右：TP 4 東壁）



図版 15 ③ 真境名遺跡掘下げ状況（左：TP 5 東壁 右：TP 6 南側より）



図版 15 ④ 真境名遺跡掘下げ状況（左：TP 7 南壁 右：TP 8 北壁）



図版 15 ⑤ 真境名遺跡掘下げ状況 (左: TP 9 北壁 右: TP10 東壁)



図版 15 ⑥ 真境名遺跡掘下げ状況 (TP11 北壁)

### (3) 小結

本遺跡地形は、TP 5、6 付近を中心に南北に傾斜していたと思われる。そこを平坦に造成するため、東側石灰岩小丘を掘削し、土留めとして石を積み、時期差は不明であるが、泥岩(クチャ)ブロックなどを別途運び入れ、平坦面造成を行っている。なお、石積や平坦面造成には、石灰岩掘削時の石累も利用したと推定される。

また、TP 3や11においては、石灰岩が掘削を受けた様相はない。TP 3では遺構らしきものを確認しているが、半截しておらず、詳細は不明である。

TP 2においては、IV層(攪拌土)下の石灰岩が平坦な様相を見せている。IV層は小破片の遺物や炭化物、シルトブロックを含む。複数回にわたる攪拌を受け、その際に、石灰岩も掘削されたと推測された。時期は、沖縄産陶器が出土していることから、近代以前と想定された。

調査とは別に、地図資料等を確認すると、カタカシラーのある小丘の形状は、測量部地形図では南北に長い丸みを帯びた長方形となっている。平成5年に土地改変が行われ、現在はこの小丘の東側が突出するような地形図(当市GIS参照 平成23年調製)となっている。

※埋蔵文化財の手続きとは別に下記の手続きを行っている。

○沖縄県赤土等流出防止条例第9条第4項において準用する同条例第9条第1項の規定に基づく事業行為通知

## 12 新里運座原遺物散布地

調査地 沖縄県南城市佐敷新里  
調査原因 個人住宅建設  
現地調査 令和元年10月4日～10月10日  
調査面積 36㎡（対象面積約1,564㎡）  
調査職員 （主任）西平剛  
（現場担当）勢理客宣子  
調査後の措置 慎重工事



第12図 新里運座原遺物散布地調査位置図（縮尺1/7500）

### (1) 位置と環境

佐敷地区の新里集落の端にあたる標高約5m前後の畑地内が今回の対象地である。南側の丘には、「イビの森」と称される場所や、伊是名から流れ着いたと伝わる「鮫川大主」が住んでいたとされる一帯（現在は、位置不明）がある。

### (2) 調査

調査対象地は2筆あり、地権者は別であったが、隣接していたため一つにまとめて、調査を実施した。2m×3mのトレンチを6箇所とした。TP1～TP6ともに、第3層から湧水があった。基本層序は1層が現在の耕作土、2層は造成土（盛土）、3層は堆積土？（陸産貝が混入）であり、さらに水分を含んだ粘土質の強い土が確認された。遺物はTP3の2層から沖縄産陶器片1点、TP6の1a層から沖縄産陶器片1点を採集しているが、中世にさかのぼる遺物や遺構の確認はなかった。

### (3) 小結

現地は、中世に遡る遺構などは確認されなかった。



図版16① 新里運座原遺物散布地掘下げ状況（左：TP1東壁 右：TP2東壁）





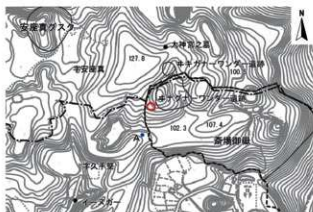
図版 16 ② 新里運座原遺物散布地掘下げ状況（左：TP 3 東壁 右：TP 4 北壁）



図版 16 ③ 新里運座原遺物散布地掘下げ状況（左：TP 5 東壁 右：TP 6 東壁）

### 13 久手堅地内

調査地 沖縄県南城市知念字久手堅  
 調査原因 遺跡内容確認  
 現地調査 令和元年12月16日  
 ～令和2年1月10日  
 調査面積 5㎡(対象面積約-㎡)  
 調査職員 (主任) 西平剛  
 (現場担当) 勢理客宣子  
 事後処理 現状変更許可申請(顔末書添付)



第13図 久手堅地内調査位置図(縮尺1/7500)

平成30年2月22日に実施された沖縄戦戦没者遺骨収集作業に伴う立会において、遺物を確認し、作業を中止させた。

翌年度に、遺跡内容確認などを実施。

整理段階で国指定史跡・名勝「斎場御嶽」指定地筆内と気づき、県に報告。担当職員と調整して、現状変更許可申請書および顔末書の提出を行った。

(承認地点A、調査箇所亦九地点)

○現状変更対象史跡など

史跡斎場御嶽及び名勝アマミクスミイ(斎場嶽)



図版17 久手堅地内採集遺物

### 14 佐敷島宜原遺物散布地

調査地 沖縄県南城市佐敷字佐敷  
 調査原因 個人住宅建設  
 現地調査 令和元年8月14日  
 対象面積 435.5㎡  
 調査職員 西平剛 勢理客宣子  
 調査後の措置 慎重工事



第14図 佐敷島宜原遺物散布地調査位置図(縮尺1/7500)

## 第2節 立会調査

### 1 知名地内

調査地 沖縄県南城市知念字知名  
 調査原因 個人住宅建設 遺物の散布有り  
 現地調査 令和元年1月17日  
 立会面積 約 - ㎡  
 調査職員 西平剛 勢理客宣子  
 調査後の措置 慎重工事



第15図 知名地内調査位置図(縮尺1/7500)

### 第3章 仲村渠殿遺跡 記録保存調査

調査地	沖縄県南城市玉城字仲村渠
調査原因	個人住宅建設
現地調査	令和元年6月3日～7月17日
調査面積	116 m <sup>2</sup> (対象面積 275 m <sup>2</sup> )
調査職員	(主任) 西平剛 (現場担当) 勢理客宣子
調査後の措置	慎重工事



第16図① 仲村渠殿遺跡調査位置図 (縮尺 1/7500)

#### 第1節 調査に至る経緯

平成30年10月から調整が始まり、現地の野外調査は令和元年6月から実施した。

[平成30年]

- 10月11日 文化財(埋蔵含む)の所在の有無及びその取り扱いについて照会
- 10月11日 周知の埋蔵文化財包蔵地として開発前の事前協議が必要なことを回答
- 10月23日 埋蔵文化財の調査の依頼について
- 12月14日 試掘調査において遺構・遺物を確認した(第2章7に内容記述)。
- 12月17日 埋蔵文化財の調査の依頼について(報告) 開発前の本調査
- 12月19日 施工主から提出のあった93条届出に対し、遺物・遺構の確認があり、発掘調査で調整と意見を付し進達。
- 12月27日 施工主と施工会社と調整を行った。その際に、次年度5月以降に調査を実施する旨を伝えた。なお、施工主から、金融機関から借入をしているが本件を事由とした支払利息等補償制度はあるか質問があり、なしと回答している。

[令和元年]

- 1月9日 県より施工主に対して発掘調査の必要性及び協力依頼を記載した埋蔵文化財の届出について通知を収受し、令和元年2月4日に施工主へ伝達した。
- 5月24日 支援委託業務が開始
- 6月3日 野外調査を実施
- 7月17日 野外調査(埋め戻し及び器材等の撤収含む)が終了
- 7月19日 文化財保護法(昭和25年法律第214号)第99条第1項の規定に基づき埋蔵文化財発掘調査着手報告
- 7月24日 施工主へ仲村渠殿遺跡発掘調査について終了を報告した
- 8月2日 支援委託業務が完了
- 8月5日 文保法第99条第1項に係る埋蔵文化財発掘調査終了報告を提出
- 8月13日 与那原警察署へ文保法第108条および遺失物法第4条第1項の規定に基づく発見届および県教育委員会へ埋蔵文化財発見届を提出

## 第2節 位置と環境

仲村渠殿遺跡は南城市玉城字仲村渠に所在する。立地は南城市の南東部、標高120mほどの琉球石灰岩台地上の縁辺に位置している。遺跡周辺の歴史的環境としては、北側約200mに県指定史跡「垣花城跡」、北東側に垣花城(跡)の製鉄所と想定されている「垣花製鉄遺跡」や貝塚時代後期からグスク時代が主となる「垣花遺跡」、また、西側約300mにはアマミキヨが築いたグスクと伝わる「ミントングスク」などがある。

また一帯は、国指定重要文化財「仲村渠樋川」や環境省選定(昭和60年)の全国名水百選である「垣花樋川」など、湧水地が多い事でも知られている。

遺跡名には、「仲村渠殿」が付されている。この「〇〇殿」の名称は、その多くが、集落の村立てや統治者にかかる人物の住居跡とされる伝承が残り、地域の拝み所となっている。しかしながら、この仲村渠殿遺跡周辺には、「仲村渠殿」はなく、代わりに調査対象地から南側約30m付近に「奥武の殿」と称される拝所がある。

その「奥武の殿」は、時代は不明であるが、奥武島と仲村渠を管理していた役人が使っていた屋敷跡と伝わっている。なお、琉球国由来記には、年中祭祀の項目があるが、「奥武の殿」は垣花村に記載されている。

現在の「字仲村渠」につながる「仲村渠村」は、文献では琉球国高究帳(1653年)には記載されていないが、琉球国由来記(1713年完成)には、「中村渠村※」の名称が確認できる。なお、絵図である惣絵図には、垣花村と仲村渠村の境が不明瞭であり、一団の集落のような描かれ方をしている。

この3点の史料からは、現在の「字仲村渠」につながる「仲村渠村」は、17世紀後半～18世紀初頭頃の間で成立したと推測される。

※参考書には「イ(にんべん)」なしの記載

## 第3節 調査

### (1) 調査計画範囲

今回の個人住宅を建てる敷地は、東西に長い菱形になっており、北側から南側へ緩やかな傾斜となっている。建物計画位置は、敷地の中央にあり建物基礎はベタ基礎となっているが、平坦にするための造成計画は北側が掘削、南側は盛土となっていた。そのため、掘削が遺構面に及ぶと判断された場所及び盛土が2m以下の場所を調査計画範囲とした。西側道路の法面は雨による土砂流出が排水溝に流れ込み、詰まることが考えられ、かつ通路として利用するため、法面縁内側を70cm程度残している。また、既存の擁壁からは1.5m程の幅を残して、調査範囲の計画を作成した。

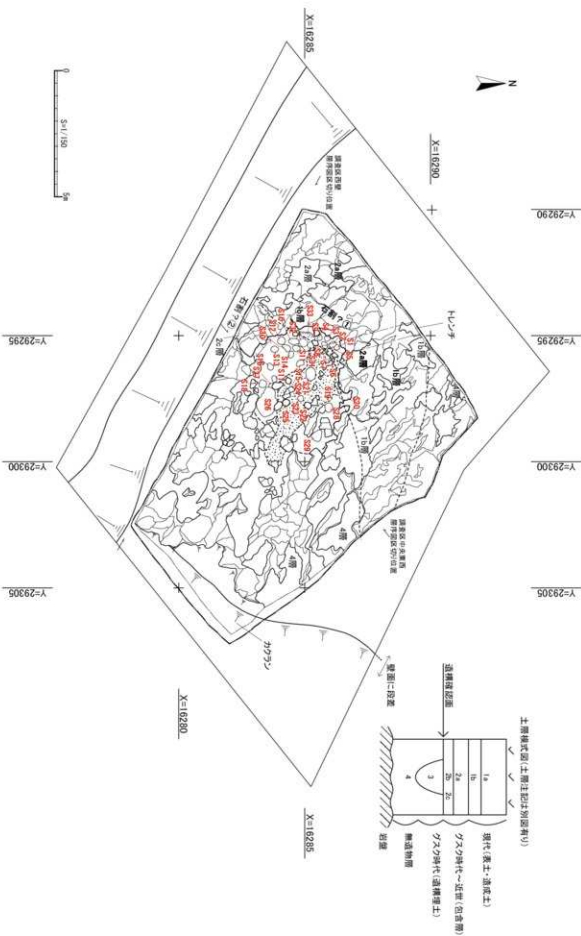
### (2) 調査の方法

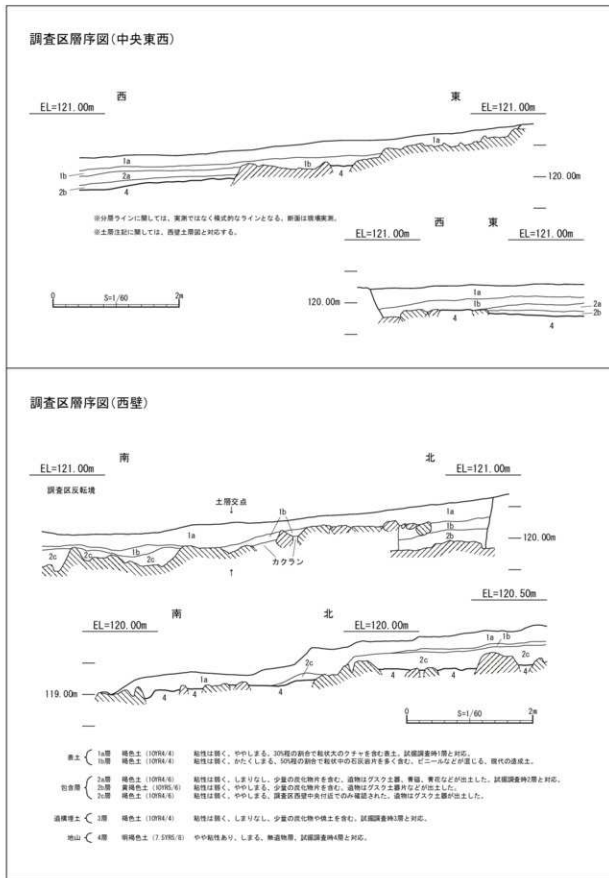
計画された調査区の位置に基本測量を行い、事前に調査区の設定を行った。

調査は掘削土を敷地内に仮置きするため、調査を2区に分けて行う反転調査とした。

調査は西半部よりバックホウによる表土除去作業から開始した。表土除去後、人力による遺構検出を行い、検出遺構は縮尺1/100で遺構配置略図にすべて記載した。遺構実測は受託業者調査員と受託業者調査補助員によって、遺構半裁断面図(1/10・1/20)、完掘状況図(1/40)、調査区層序図(1/20)の作成を行い、遺構写真は35mmリバーサルフィルムおよび一眼レフデジタルカメラを使用し、受託業者調査員と受託業者調査補助員が随時撮影を行った。

第16図2 出土遺物配置図・平面図序 (縮尺1/150)





第16図③ 調査区層序図 (S=1/60 上:中央東西 下:西壁)

反転調査補足：西側を先に掘下げ作業を行い、遺構面検出の後に記録を作成、残り半分を重機および人力掘下げを行った。その時の排土は、北西側の岩盤検出面（遺構は確認されず）や対象外のスペースに盛り上げていき、遺構が確認された面は、全体で観察ができるように工夫している。

### (3) 層序 (第16図③)

基本層序は、第1層が表土、第2層は褐色土の遺物包含土、第3層は遺構埋土（実際には、遺構毎で分層している）、第4層が遺構検出面となっている。地権者の話から重機によって岩盤破砕などを行い造成したと話があった。石灰岩礫や近年の遺物などを含む第1層はその時の削平や攪拌が行われた造成土と判断した。第1層は、表土から30cm程度で確認されており、影響を受けた岩盤はなだらかなレベルで連なっている。なお、岩盤空白地帯で検出された遺構群上には、2層が堆積しているが、露頭する岩盤頭は比較的滑らかで平らな面を呈しているようにみえる。

第2層は、遺物の出土傾向が深部に行くにつれて変化しているように思われた。しかしながら今回は、遺物の散布状況記録や、グリッドごとの取り上げを行っていないが、念のため、調査掘下げ途中から、取り上げ層序を分層して遺物は分けるようにしていた。分層の内容は、簡単に平面で図示している（第16図②）。

### (4) 遺構 (第16図②④⑤、図版18)

遺構検出作業時に遺構の可能性を考えたものは33基確認している（第16図②）が、半裁で12基が何らかの遺構と判断された。11基は小穴群と判断し、1基は焼土坑としてまとめている。

その他、岩盤の石切り痕、破砕礫と思われる場所など、気になる点があった。

#### ①小穴群 (第16図④第12表、図版21～32)

小穴群は調査区中央に位置し、11基 (S12・14・17・21・23・27・28・30・31・32・33) が確認された。検出面の標高は119.69～119.84mであり、各小穴の平面形状は円形ないし楕円形を呈する。埋土は褐色土を基調とし、すべて単層であった。遺物はグスク土器などが出土している。

第12表 遺構観察表

※半裁の結果、遺構と判断したもののみ記載

遺構No.	地区名	グリッド	検出写真	撮影日	検出時観察事項	芯心	芯心観察事項	半裁等	半裁時観察事項	分層	断面図	写真	完備	写真	平面図	径と深度の単位はm		遺構判断等メモ
																径	深度	
S12	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.31	0.07	ビット
S14	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.29	0.08	ビット
S17	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.26	0.29	ビット
S21	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.53	0.28	ビット
S23	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.24	0.05	ビット
S26	—	—	集合	○	炭化物検出状況を撮影した	—	—	—	—	○	○	○	○	○	○	0.75	0.11	伊跡?
S27	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	○	○	○	集合	○	0.50	0.11	ビット
S28	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.38	0.19	ビット
S30	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.37	0.10	ビット
S31	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.34	0.11	ビット
S32	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.37	0.08	ビット
S33	—	—	集合	○	—	—	—	—	—	単	—	○	○	集合	○	0.42	0.07	ビット

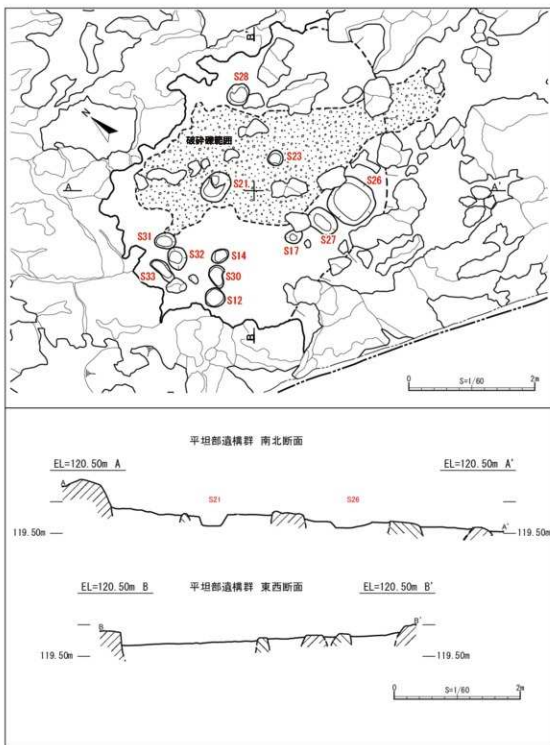
②焼土坑 (第16図⑤、図版21、33～37)

S26は調査区中央に位置し、検出面の標高は119.69～119.73mである。平面形状は隅丸方形を呈し、一段掘り下げ時には炭化物の拡がりが見られた。また、遺構底面は部分的に被熱を受けた痕跡が確認された。出土遺物として、土器や陶磁器類は出土していないが、埋土中に径0.5～3.0cm大の焼土塊が多量に含まれており、その内、2点のみ鉄滓が認められた。炉跡の可能性が考えられる遺構である。

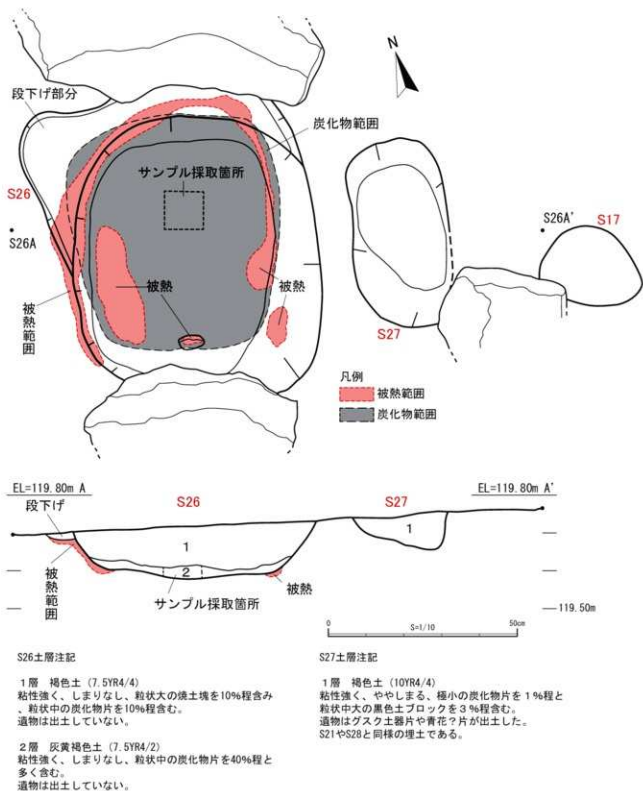


図版18 オルソ画像 (S=1/100)





第16図④ 遺構完掘状況図 (S=1/60 上：遺構群平面 下：平坦部断面)



第16図⑤ S26 (伊跡?) 遺構平面図および断面図 (S=1/10)

## ③その他

岩盤に石切り痕と思われる痕跡（図版 41、42（第 16 図④上の B 印下の岩盤））が観察された。その影響か、岩盤が円形状の区画を呈しているように見える。また、S26（焼土坑）の北側には表面に細かな礫が広がっていた（第 16 図④破碎礫範囲）。S21 の掘り下げ後の壁面から観察したところ、石灰岩礫が土砂とともに入っていることが確認できた。この破碎礫は傾斜面と S26（焼土坑）の位置を考慮すると、水はけをよくするための設備ととれるが、この破碎礫範囲が人為的か自然か判断できなかった。

なお、S26 から 80 cm 程度南東側の露頭岩盤上面は整形したような平坦面をしている。

## (5) 遺物（第 16 図⑥・第 13 表・第 14 表、図版 19）

岩盤間隙および重機掘下げ後の人力掘削作業による遺物採集となる。遺物は近年の造成の影響か、小片の遺物が多かった。プラスチックや小片などは現場廃棄するよう努めた。

表土は、カムイヤキの壺（波状文）やグスク土器、沖繩産陶器などがある。

1 層は、カムイヤキやグスク土器、白磁などや近世の沖繩産陶器、近現代磁器の破片が出土している。

2 層は現場での感覚で遺物の出土状況を鑑み a～c 層に分けた。2 a 層は比較的、陶磁器片が見受けられるが、小片も多いことから近年の造成の影響があったのではと考えられる。2 b 層はグスク土器のみであり、2 c 層はカムイヤキや褐釉陶器などが混ざる。

最終的に遺構と捉えた 12 基中 11 基から、遺物が出土している。主に土器片が多いが、S26 からは焼土が多く、遺物の内容からも炉跡とわかるものである。S27 は沖繩産軟質土器片や染付（有文）片が出土している。

第 13 表① 仲村築殿遺跡 出土遺物点数表 ※ () 内の遺構番号表記は、半段の結果、浅いため遺構と判断は避けている。

表土

カムイヤキ	胴部片 伊恋 A 群 (1) 胴部片 伊 B 群 (1)
グスク土器	胴部片 (5) 底部片 (1)
土器	小片 (11)
白磁	胴部片 森 C 群 (1)
青磁	胴部片大 IV 時期 (2) 蔭花口縁片 14 c 以降 (1)
陶器	施釉胴部片 (1)
陶器 (沖繩)	無釉胴部片 (2) 灰釉碗口縁片 (1) 碗施釉底部片 (1) 瓦小片 (4) 施釉小片 (1)
その他	石材片 (1)

1 層

その他	叩き石? (1)
-----	----------

1 a 層

カムイヤキ	胴部片 伊 B 群 (1) 胴部小片 (1)
グスク土器	口縁片 糸鉢 (1) 胴部片 (8) 底部片 糸 II (1) 底部片 (1) 土器小片 (2 6)
土器	小片 (32)
白磁	瓶? 頸部小片 (1) 皿底部片 森 D 群 (1) 胴部小片 森 C 群 (1)
青磁	碗口縁片 大龍 II (1) 皿×坏 底部片 (外底輪はぎ) (1) 胴部片 14 c 以降 (1) 底部片 (外底まで施釉) (1) 高台片 大龍 IV 以降 (1) 胴部片 大龍 IV 以降 (1)
磁器	赤絵? 口縁片 (1)
陶器 (沖繩)	灰釉碗高台片 (1) 無釉壺口縁片 (1) 施釉口縁小片 (1) 瓦片 (6) 瓦小片 (4) 胴部片 (1) 胴部小片 (1) 施釉小片 (1) 施釉胴部小片 (1) 無釉胴部小片 (1) 陶質土器片 (2) 瓦質土器小片 (1)
陶器 (県外)	黒釉碗小片 (1)
その他	石材?? (2) 現代磁器小片 (3) 焼土

### 第3章 仲村集殿遺跡 記録保存調査

第13表② 仲村集殿遺跡 出土遺物点数表 ※ ()内の遺構番号表記は、半截の結果、浅いため遺構と判断は避けている。

#### 1b層

カムイヤキ	胴部片 伊B群 (1) 胴部小片 (1)
グスク土器	口縁片 (1) 胴部片 (8) 底部片 (2)
土器	小片 (37)
白磁	碗底部片 森C群 (1) 皿底部片 森D群 (1) 小片 (1)
青磁	碗口縁片 14c? (1) 小片 (1)
染付	東南アジア産?口縁小片 (1)
染付?	口縁小片 (1) 胴部小片 (1)
陶器 (沖縄)	無軸胴部片 (1) 瓦片 (4) 陶質土器小片 (1) 無軸胴部小片 (1) 褐輪把手小片 (1) 瓦小片 (1)
陶器 (県外)	黒輪碗胴部小片 (1) 褐輪胴部小片 (1)
その他	近現代磁器小片 (2) 石材? (1)

#### 2a層

カムイヤキ	胴部片 伊A群 (1) 底部片 伊B群 (1)
グスク土器	口縁片 糸II (1) 胴部片 (27) 底部片 糸II (1)
土器	小片 (70)
青磁	碗胴部片大龍II b? (1) 碗胴部片大龍II b? (1) 碗底部大龍IVイ (1) 盤?口縁片 (1) 坪口縁片? 大龍IV? (1) 胴部小片 (1)
磁器	白磁?小片 (2) 小片 (1)
染付	胴部小片 (2)
陶器 (沖縄)	灰輪碗底部片 (1) 胴部小片 (1) 施輪碗口縁片 (1) 施輪胴部小片 (2) 無軸胴部小片 (1)
陶器	施輪口縁小片 (1) 褐輪胴部片 (1)
その他	魚骨 (ブダイ?) (1) 焼土 石材? (1) 骨片 近現代磁器小片 (1)

#### 2b層

グスク土器	胴部片 (1)
-------	---------

#### 2c層

カムイヤキ	胴部片 伊B群 (1)
グスク土器	口縁片 糸鍋II a×碗 (1) 底部片 (1) 胴部片 (2)
土器	小片 (41)
陶器	褐輪陶器小片 (1) 施輪口縁小片 (1)
陶器 (県外)	黒輪陶器小片 (1)

#### 2層

グスク土器	底部片 (1)
土器	小片 (7)

#### (S9)

土器	小片 (3)
----	--------

#### S12

土器	小片 (2)
----	--------

#### S14

グスク土器	胴部片 (1)
-------	---------

#### (S19)

カムイヤキ	胴部片 (1)
-------	---------

#### (S20)

グスク土器	胴部片 (1)
-------	---------

#### S21

カムイヤキ	口縁小片 (1)
グスク土器	胴部片 (1)
土器	小片 (4)

#### S23

グスク土器	胴部片 (1)
-------	---------

#### S26 単層

その他	焼土多数
-----	------

#### S26 1層

その他	焼土多数 スラグあり
-----	------------

#### S26 2層

その他	焼土多数
-----	------

#### S27

染付	胴部片 (波状文?) (1)
陶器 (沖縄)	陶質土器片 (1)

#### S28

土器	小片 (1)
その他	焼土

#### S30

グスク土器	胴部片 (1)
-------	---------

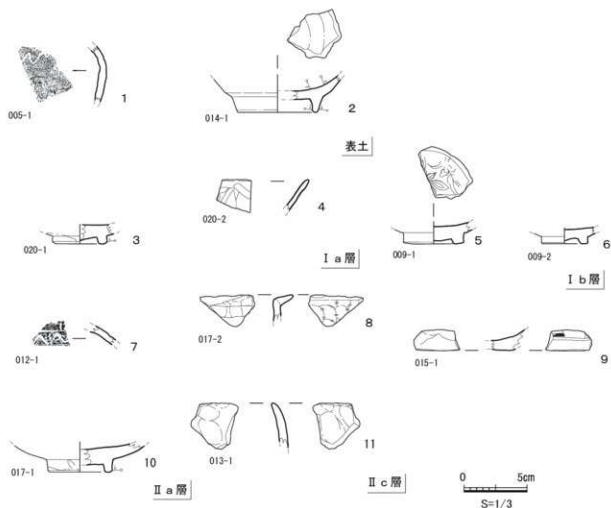
#### S31

グスク土器	胴部片 (1)
土器	小片 (1)

#### S32

土器	小片 (1)
----	--------

※ (遺構番号) は、半截の結果、浅いため遺構と判断は避けたもの。



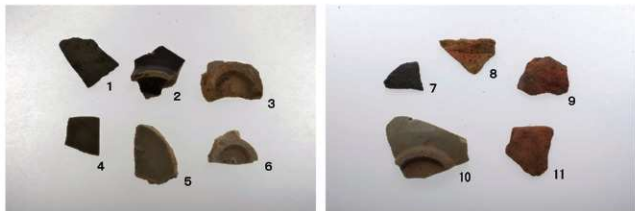
第16図⑤ 遺物実測図 (S=1/3)

第14表① 仲村渠殿遺跡 実測遺物観察表

図番号	層	遺物	分類	観察事項	胎土混入物	色調	整理番号
第16図 ⑤ 図版19 1	表土	カマイヤキ 盃肩部	伊(2005) A群	器厚6mm程度に薄い。内面はロクロナゲ、当て具とみられる痕、外面は削り、波状文あり。※外面に米粒圧痕?	2~5mm大の砂粒1mm以下の白色粒(少)	胎: 灰白色 (N5/1)	005-1
〃 〃 2	〃	沖繩産麻 軸陶器 碗	—	高台が高く、腰部は張り出さず斜め上方へ立ちあがる。内面に透明釉後、見込みに蛇の目軸はぎ。内底に砂粒付着。外面は髑軸を施し高台端部の軸葉を削り取る。復元底径6.2(残存1/4)	1mm以下の白色粒、黒色粒(極小)	胎: 灰白色 軸: 内-灰白色 (7.5VR7/1) 外-黒褐色 (10VR3/1)	014-1
〃 〃 3	I a	白磁碗 底部	森田D	内面および外面腰部付近まで薄く施釉。軸だれ有り。高台は方形を呈し、外面を斜めに削る。復元底径4.4(残存1/2)	1mm以下の白色粒(極少)	胎: 灰白色 粗い 軸: 灰白色 (2.5VR/1)	020-1

第14表② 仲村集殿遺跡 実測遺物観察表

図番号	層	遺物	分類	観察事項	胎土混入物	色調	整理番号
第16図 ⑤ 図版19 4	I a	青磁碗 口縁	大宰府 甕Ⅱ類	外面に片形の竊進弁文。	1mm以下の 白色粒(極少)	胎:灰白色 (7.5YR/1) 軸:灰オリーブ (5Y5/2)	020-2
〃 〃 5	I b	白磁碗 底部	森田C	内面薄く施釉。貫入有り。印花文。 外面は釉薬がかかっていない。底部 は厚く外底中央を削り取る。高台は 方形状を呈し、畳付けは外面にやや 斜めとなる。復元底径4.8(残存 1/4)	1mm以下の 白色粒(極少)	胎:灰白色 (2.5YR/1) 軸:透明釉(灰 白色)(7.5Y7/1)	009-1
〃 〃 6	〃	白磁皿 底部	森田D	内面薄く施釉。外面に軸はかから ない。高台内面を斜めに削り、外底中 央部は突出する。貫入有。復元底径 3.7(残存1/2)	1mm以下の 黒色粒(極少)	胎:灰白色 (5Y8/1) 軸:透明釉(灰 白色)(5Y8/1)	009-2
〃 〃 7	Ⅱ a	カムイ ヤキ 壺肩部	伊 (2005) A群	器厚5mm程度と薄い。内面は当て具 痕を撫で消し、外面は叩き痕が見ら れる。また、外面に沈線と波状文。 ロクロは左回転と思われる。	1mm以下の 白色粒(多量)	胎:灰色 (5Y5/1)	012-1
〃 〃 8	〃	グスク 土器 口縁	余数 (1991) 鉢Ⅱ	口縁は、ほぼ直立する体部に外側へ 屈曲するように成形。内面は指オサ エのちナデ調整。外面は指オサエ底 が観察出来る。	1mm以下の 白雲母片、黒雲 母片、石英(多量)	胎:浅黄褐色 (7.5YR8/6) にぶい黄橙 (10YR7/4)	017-2
〃 〃 9	〃	グスク 土器 底部	余数 (1991) Ⅱ	内外面調整不明瞭。内面立ち上がり ナデ調整か、工具痕あり。	1mm以下の石英 (少量)、1mm以下 の白雲母片、黒雲 母片(多量)	胎:橙色	015-1
〃 〃 10	〃	青磁碗 高台	大宰府 甕Ⅳイ	高台は高く、外面端部を斜めに削り 取る。腰部は張り出し内面見込みが 広がっている。釉薬は外面に施さ れ、高台外面に軸だれがある。復元 底径5.1(残存1/4)	1mm以下の白色粒 (極小)	1mm以下の白色 粒(極小)	017-1
〃 〃 11	Ⅱ c	グスク 土器 口縁	余数 (1991) 鉢Ⅱ	内外面ニビオサエ成形。上面方向へ なでつける感あり。	2mm以下の赤色粒、 3mm以下の橙色粒 (極小)	胎:橙色 (7.5YR7/6)	013-1



図版19 仲村集殿遺跡 実測遺物写真(左:1~6 右:7~11)(南)

## 第4節 自然科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

仲村渠殿遺跡は南城市玉城字仲村渠に所在する。発掘調査でグスク時代の住居跡や炉跡と想定される遺構が検出されている。今回は炉跡の覆土から採取した土壌（第16図⑤参照）を対象に微細遺物に関する情報と年代観を得る目的で自然科学分析を実施する。

#### 1. 試料

試料は、遺構番号S26の2層より採取された土壌1点である。放射性炭素年代測定は土壌より抽出した炭化物を対象とする。微細物分析は、種実遺体や炭化材などの微細な遺物の抽出と種実遺体の同定を実施する。

#### 2. 分析方法

##### (1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。炭化材、炭化種実は、試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理:AAA)。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。一方、試料が脆弱で1mol/Lでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度のNaOHの状態での処理を終え(Aaと記す)、更に試料の損耗が激しいと判断された場合は塩酸処理で止める(HClと記す)。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラフアイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge 3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラフアイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

δ 13Cは試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver and Polach, 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV8.2 (Copyright 1986-2020 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

## (2) 微細物分析

試料 300 g を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5 mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(約 20 回)。残土を粒径 0.5 mm の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料(炭化物・植物片主体)と水に沈んだ試料(岩片・土粒主体)を、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物・植物片主体試料・岩片・土粒主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体の他、主に径 2 mm 以上の炭化材などの遺物を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本や中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材、炭化材主体、岩片・土粒主体は重量を一覧表に併記する。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れて保管する。他の抽出物と残渣も容器に入れて保管する。

## 3. 結果と考察

## (1) 放射性炭素年代測定

結果を第 15 表に示す。試料の測定年代(補正年代)は  $415 \pm 20$ yrBP の値を示す。

暦年較正は、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い( $^{14}\text{C}$  の半減期 5,730  $\pm$  40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正年代は、測定誤差を  $2\sigma$  として計算させた結果、calAD1437 ~ 1608 である。暦年代は 15 世紀前半 ~ 17 世紀初頭で、調査所見でグスク時代とされることから概ね調和する結果であった。

第 15 表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta$ $^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用	暦年較正年代			Code No.			
						年代値	標準					
S26 伊勢覆土 2層	炭化材	AAA	$415 \pm 20$	$-20.91 \pm 0.41$	$417 \pm 20$	$\sigma$ cal AD	1446 - cal AD	1470	504 - 480 calBP	1,000	pol-	YU-
						$2\sigma$ cal AD	1437 - cal AD	1492	513 - 458 calBP	0,989	13972	15416
						cal AD	1603 - cal AD	1608	347 - 342 calBP	0,011		

- 1) 年代値の算出には、Libby の半減期 5,568 年を使用。
- 2) yrBP 年代値は、1950 年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差  $\sigma$  (測定値の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。
- 4) AAA は酸-アルカリ-酸処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REVS. 2 (Copyright 1986-2020 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。
- 6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は  $\sigma$  は 68%、 $2\sigma$  は 95% である。

## (2) 微細物分析

結果を第 16 表に示す。また、種実の写真を図版 19 に示して同定根拠とする。

遺構番号 S26 の 2 層の土壌試料 300 g を洗い出した結果、種実遺体は、草本のアカザ属の種子 3 個が同定された。種実以外は、炭化材 2.17 g (最大 13.8 mm)、炭化材主体 1.16 g 岩片・土粒主体



17.89 gを量る。

草中で中生植物のアカザ属の種実遺体が検出されたことから、遺構周辺は明るく開けた、やや乾いた草地であったと考えられる。

第16表 微細植物片洗い出し・種実同定結果

分類群	部位・粒径	遺構 No. S26	備考
草本種実		2層	
	アカザ属	種子	3 (個), 0.001 g未満
炭化材		13.77	最大径 (mm)
	> 4 mm	1.21	乾重 (g)
	4 - 2 mm	0.96	乾重 (g)
炭化材主体	2 - 1 mm	0.63	乾重 (g), 草本質?含む
	1 - 0.5 mm	0.53	乾重 (g), 草本質?含む
岩片・土粒主体	> 4 mm	14.64	乾重 (g), 焼土粒含む
	4 - 2 mm	3.05	乾重 (g)
	2 - 1 mm	0.17	乾重 (g)
	1 - 0.5 mm	0.03	乾重 (g)
分析量		300	湿重 (g)



図版 20 種実遺体

## 引用文献

- Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughes K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J., Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). *Radiocarbon*, 62, 1-33.
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of <sup>14</sup>C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑 (2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる 734種 増補改訂一. *ネイチャーウォッチングガイドブック*, 誠文堂新光社, 303p.

## 第5節 総括

地表は、過去に重機を入れて掘削した場所であるため、本来の岩盤の形状は不明である。調査で露出した岩盤上面が比較的平坦になっている理由は、その時の掘削によるものが多い。なお北側の擁壁側には、そのことを示す多数の栗石が点在していた。

層序は、包含層とした2(a/b/c)層のうち、2a層は12世紀頃から近現代にかけての遺物が混在しているため、重機掘削時の影響を受けている層と首肯される。

直径約12mの岩盤の空白地帯(第16図④)には、2b層が堆積しており、その層を剥いだあとに遺構が確認されている。2b層の出土遺物はグスク土器の胴部1点のみである。遺構出土遺物は、S27以外は土器片あるいはグスク土器胴部片もしくはカムイヤキ片(伊A群およびB群)の共伴となっている。また、南側の傾斜面上部に確認された2c層はカムイヤキ(伊B群)、グスク土器片以外には、小片で褐軸陶器、黒軸陶器が確認されている。

この2b・c層が、遺構面を覆う形で検出されていることから、遺構が廃絶された後の堆積と捉えられる。

遺構は、焼土坑(S26)と小穴群、露頭石灰岩の上面が滑らかな平面に整形される箇所、岩盤の石切り痕と思われる箇所や破砕礫範囲などが確認された。

焼土坑(S26)は、スラグが出土しているため、製鉄にかかる遺構と考えられる。

小穴群は方形になる明確なプランはつかめていない。露頭石灰岩の上面が滑らかな平面に整形される箇所は、礎石的な用途が想定された。一方、岩盤の石切り痕と思われる類例が、沖縄県恩納村山田城跡に確認されているため、本遺跡についても、同様の痕と考えられた。今後は事例増加における所見が進むことを期待する。

こうした遺構は、岩盤の空白地帯に集中しており、遺構群の関係性については今後の検討の余地を残している。

なお、遺物から見る年代観であるが、遺構出土は土器やグスク土器、カムイヤキが多く、1基のみ沖縄産陶器が出土している。遺構の使用年代だけを捉えたとグスク時代の早い時期と思われたが、一方で焼土坑(S26)の放射性炭素年代測定法の暦年では、15世紀前半～17世紀初頭となっている。ともにグスク時代の範疇であり、グスク土器の遺跡出土が16世紀頃まで下ることを考えると、放射性炭素年代測定の結果は反するものではない。

これらを踏まえると、本遺跡は15世紀以降に利用され、廃棄後も周辺に何らかの生活空間があったと想定される。



図版 21 遺構群核出状況（半截後）北側より



図版 22 S12 土層断面状況 南より



図版 23 S14 土層断面状況 南より



図版 24 S17 土層断面状況 南より



図版 25 S21 土層断面状況 南より



図版 26 S23 土層断面状況 南より



図版 27 S27 土層断面状況 北東より



図版 28 S28 土層断面状況 南より



図版 29 S30 土層断面状況 南より



図版 30 S31 土層断面状況 南より



図版 31 S32 土層断面状況 南より



図版 32 S33 土層断面状況 南より





図版 33 S26 検出状況 北東より



図版 34 S26 炭化物検出状況 北東より



図版 35 S26 土層断面状況 北東より



図版 36 S26 完掘状況 北東より



図版 37 S26 断ち割り状況 北東より



図版 38 遺構群完掘状況 北より



図版 39 遺構群完掘状況 東より



図版 40 遺構群完掘状況 南より



図版 41 石材加工痕?検出状況① 南より



図版 42 石材加工痕?検出状況② (接写) 東より



図版 43 作業風景①



図版 44 作業風景②

## 参考文献

- 沖縄県南城市 2023年3月 『第2次南城市総合計画(改訂版)』
- 沖縄県教育委員会 2015年3月25日発行『沖縄県史 各論編』「第1巻 自然環境」
- 伊波普猷 東恩納克淳 横山重 編纂 1972年4月12日『琉球史料叢書』「第二巻(琉球国由来記巻十三)」
- 森田勉 1982年「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 上田秀夫 1982年「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 小野正敏 1982年「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 伊仙町教育委員会 2005年3月 伊仙町埋蔵文化財調査報告書(12)『カムイヤキ古窯跡群IV-平成13年から平成16年度カムイヤキ古窯跡群発掘調査等事業-』
- 沖縄県玉城村教育委員会 1991年3月 玉城村文化財調査報告書第1集『国指定史跡糸数城跡-発掘調査報告書1-』
- 佐敷村 1964年3月『佐敷村誌』(P278)
- 佐敷村 佐敷町史編集委員会『佐敷町史』「二 民俗 第1節」(P6)
- 照屋善義 2000年『技術と科学 沖縄の陶器』(有)平山印刷withなんくるプロ
- 佐敷町史編集委員会 1989年3月『佐敷町史』「三. 自然」(P13～15)
- 大里村史編集委員会 1982年3月31日『大里村史 通史編』「字稲福」(P608)
- 玉城村役場 1977年5月20日『玉城村誌』「第四章行政の変遷 第1節 行政区画の変遷」(P33)
- 沖縄県教育委員会 1983年3月 沖縄県文化財調査報告書第50集『稲福遺跡発掘調査報告書』「上御願地区」
- 南城市教育委員会 2018年3月『南城市の御蔵』「16. 字船越の拝所」(P231～P238)
- 南城市教育委員会 2018年3月『南城市の御蔵』「3. 字仲村渠の拝所 ㊦典武之殿」(P175)
- 沖縄県玉城村教育委員会 1995年3月 玉城村文化財調査報告書第2集『玉城村の遺跡-詳細分布調査報告書-』  
「第IV章 8. 仲村渠殿遺跡」(P17)
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007年『紀要 沖縄埋蔵研究5』「沖縄における貿易陶磁研究」  
沖縄県立埋蔵文化財センター
- 太宰府市教育委員会 2000年3月 太宰府市の文化財 第49集『大宰府桑坊跡XV-陶磁器分類編-』
- 木村謙介 2010年3月 壺屋焼物博物館紀要 第11号『沖縄産輪軸陶器に関する基礎研究1 ～灰輪軸を中心に～』
- 糸数字誌編集委員会 2012年3月30日『糸数字誌 南城市玉城』「第2章 歴史」(P24)
- 恩納村博物館 2021年度 恩納村文化普及事業 発掘調査速報収録録『山田城跡重要遺構確認調査』「TP 8」(P15)
- 沖縄県・知念村教育委員会 1986年3月 知念村文化財調査報告書第4集『知念村の遺跡-詳細分布調査報告書-』
- 南城市教育委員会 2022年11月30日 第3刷『南城市のグスク』(P55～58)
- 南城市教育委員会 2018年3月『南城市の御蔵』「17. 字稲福区の拝所 ㊦カタカシラ」(P264)
- 大里村教育委員会 2005年12月 大里村文化財調査報告書第7集『大里村の民俗文化財』「稲福区」(P38)
- 地図参考資料(閲覧)
- 琉球国史絵図(間切集成図) 南城市史編集委員会 2010年3月『南城市史 総合版(通史)』「表紙裏参照」
- 時系列地形図閲覧サイト『今昔マップ on the web』©谷 謙二
- 南城市教育委員会 2018年3月『南城市の御蔵』
- 南城市知念文化協会 2006年6月11日『知念村の御蔵と殿と御願行事』知念村文化協会学術部編
- 年表参考資料
- 財団法人 沖縄県文化振興会史料編纂室 2010年2月26日『沖縄県史 各論編』「第三巻 古琉球」(P4)

# 報告書抄録

ふりがな	しないいせきはっかつちょうさほうこくしょ							
書名	市内遺跡発掘調査報告書V							
副書名	— 予備調査 (H30/R1) および仲村渠殿遺跡記録保存 —							
シリーズ名	沖縄県南城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第22集							
編著者名	宜野座隆行 勢理客宜子 横山幸平 勢理客智也 バリノサーヴェイ株式会社 木村謙介 (株式会社 バスコ 沖縄支店) 小石龍信 (株式会社 埋蔵文化財サポートシステム 沖縄支店)							
編集機関	沖縄県南城市教育委員会 文化課							
所在地	〒901-1495 沖縄県南城市佐敷字新里1870 TEL. 098-917-5374 FAX 098-917-5436							
発行年月日	2024年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °' "	東経 °' "	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘 原因	
手登根島之上原 ※1	字手登根 (てどこん)	472158			20180709 ～0712	8㎡	確認調査	
稲福遺跡 (いなふくいせき)	字大城 (おおしろ)	472158			20180628	11㎡	確認調査	
新里運座原 ※1	字新里 (しんざと)	472158			20180808 ～0908	8㎡	確認調査	
中山海岸 ※1	字中山 (なかやま)	472158			20181204 ～1210	30㎡	試掘・確 認調査	
玉城字糸敷地内 ※2	字糸敷 (いとかけ)	472158			20181225 ～0123	約48㎡	試掘調査	
玉城字船越地内	字船越 (ふなこし)	472158			20181211 ～1213	32㎡	試掘・確 認調査	
仲村渠殿遺跡 (なかなだかりいせき)	字仲村渠 (なかなだかり)	472158			20181204	6㎡	確認調査	
下代原遺跡 (しちや だいばらいせき)	字佐敷 (さしき)	472158			20190523	8㎡	確認調査	
手登根島之上原 ※1	字手登根 (てどこん)	472158			20190530	8㎡	確認調査	
久手堅地内	字久手堅 (くでけん)	472158	-		20190710	2㎡	試掘調査	
真境名遺跡 (まじ きなないせき)	字稲嶺 (いなみね)	472158			20190924 ～1004	92㎡	確認調査	
新里運座原 ※1	字新里 (しんざと)	472158			20191004 ～1010	36㎡	確認調査	
久手堅地内	字久手堅 (くでけん)	472158			20191216 ～0110	5㎡	確認調査 (内容)	
佐敷島宜原 ※1	字佐敷 (さしき)	472158			20190814	2㎡	試掘調査	
知名地内	字知名 (ちな)	472158			20190117	-㎡	立会	
仲村渠殿遺跡 (な かなだかりいせき)	字仲村渠 (なかなだかり)	472158			20190603 ～0717	116㎡	記録保存	



所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
仲村栗殿遺跡	製鉄関連遺跡か？	グスク時代	伊跡 (S26)、ピット状遺構	カムイヤキ、グスク系土器、沖縄産陶器など	伊跡 (S26) からはスラグが出土している

※1 遺物散布地

※2 後日、文化財保護法第99条に基づく予備調査報告で新規発見遺跡、名称「根石グスク周辺遺跡」として提出している。なお周辺には新規発見の陣地塚があるが、太平洋戦争時の記録に陣地塚名称を確認できなかったため、「根石グスク周辺陣地塚群」として登録している。

※ 発掘調査原因 確認調査：周知の埋蔵文化財包蔵地内の場合 試掘調査：周知の埋蔵文化財包蔵地外の場合

沖縄県南城市文化財調査報告書第22集

市内遺跡発掘調査報告書V

—予備調査（H30/R1）及びび仲村渠殿遺跡記録保存—

発行日 2024（令和6）年3月  
発行 沖縄県南城市教育委員会  
〒901-1495  
沖縄県南城市佐敷字新里1870  
TEL (098)917-5374  
FAX (098)917-5436  
印刷 有限会社 南風原印刷  
〒902-0073  
沖縄県那覇市上間571番地1  
TEL (098) 834-1616







